粕屋町文化財調査報告書第 61 集

内橋登り上り遺跡第 7 地点

2023

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、県道福岡東環状線拡幅工事に伴い、令和3（2021）年度に粕屋町教育委員会が実施した内橋登り上り遺跡第7地点の発掘調査の記録であります。

調査地周辺は古代の遺跡が多く存在し、糟屋郡最大級規模の掘立柱建物や大宰府式鬼瓦が出土した内橋坪見遺跡、精巧で大型の横板組井戸と貴賓専用の精美な土師器が見つかった内橋牛切遺跡、朝鮮半島系遺物が出土した内橋鏡遺跡や内橋柚ノ木遺跡、多々良川の河口で物資集積施設として栄えた多々良込田遺跡、糟屋評（郡）衙に比定される国史跡阿恵官衙遺跡などの奈良時代の遺跡が周囲にあります。さらに大宰府と都を結ぶ駅路が調査地近辺を通過していることからみましても、海上・河川・陸上交通が交わる重要な地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、内橋登り上り遺跡第7地点では、奈良時代以前の獣骨や渡来系遺物が検出されました。周辺遺跡の状況を勘案しても大陸と関連する先進的な地域であったことが判明しつつあります。

本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

令和5年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長　西村　久朝

目　次

3　経過・位置と環境
4 調査に至る経過
4 調査体制
4 地理的環境
4 歴史的環境

7　調査成果
10 遺跡の概要
10 掘立柱建物
10 土坑
14 溝状遺構
23 不明遺構
31 包含層等出土遺物

36 おわりに

45　図版

発行	粕屋町教育委員会
調査起因	県道福岡東環状線拡幅工事
現地調査	令和3(2021)年10月25日～令和4(2022)年3月7日
整理調査	令和4(2022)年4月1日～令和5(2023)年3月31日
使用方位	座標北(国土座標第Ⅱ系[世界測地系])。真北に対して0°17′西偏。
遺構実測・遺構製図	株式会社島田組九州支店
遺物実測	福島日出海、常盤拓生、尾方禎莉
遺構撮影	尾方禎莉
執筆	福島日出海
遺物製図	高橋幸作、松永メイ子
遺物撮影・編集	高橋幸作
資料整理	岡部有貴、常盤拓生、水上良行

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

経過・位置と環境

調査に至る経過

内橋登り上り遺跡第７地点の調査は、福岡県糟屋郡粕屋町内橋東二丁目 301-3、302-20 において、福岡県福岡県土整備事務所より令和３年１月 28 日に県道福岡東環状線拡幅工事に伴う埋蔵文化財事前審査願書が提出されたことに起因する。

当該計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋登り上り遺跡に隣接していたため、同年３月 25 日、26 日、７月 26 日、27 日に試掘調査を実施したところ、古墳時代から奈良時代にかけての遺構、遺物を検出した。この調査結果に基づき協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査実施後に工事を着手することとなった。発掘調査は令和３年10月25日～令和４年３月７日、発掘調査報告書作成に係る遺物整理作業は令和４年４月１日～令和５年３月 31 日の期間において実施した。発掘調査にかかる遺構掘削業務及び遺構図面作成業務等に関しては株式会社島田組九州支店へ委託した。出土遺物および図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

また、地域住民の方々をはじめ、関係者の皆様には調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

令和 3(2021) 年度
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村 久朝
社会教育課長　新宅 信久
同課文化財係主幹　西垣 彰博
同課同係主任主事　髙橋 幸作
同課同係会計年度任用職員
尾方禎莉(調査担当)、常盤津由美、福島日出海、松永メイ子、毛利須寿代

令和 4(2022) 年度
調査主体　粕屋町教育委員会
教育長　西村久朝
社会教育課長　臼井賢太郎
同課文化財係主幹　西垣彰博
同課同係主査　髙橋幸作
同課同係会計年度任用職員
岡部有貴、常盤拓生、常盤津由美、福島日出海（報告書担当)、松永メイ子、水上良行、毛利須寿代

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は 14.13k㎡と狭く、大半が平坦な地勢である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区分される。東側の三郡山地を源とする３本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く、平坦な地勢の割に沖積地は河川流域に限られている。

内橋登り上り遺跡第７地点が位置する博多湾沿岸は、多々良川・須恵川・宇美川が河口付近で合流し、古代においては入江状の内海を形成していた。遺跡はこの内海に近く、海上・河川交通の集中する地域に立地している。

歴史的環境

粕屋町周辺は、博多湾東岸に位置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。多々良川流域には、松菊里型住居で構成された渡来系稲作集落である江辻遺跡が弥生時代早期に登場する。

弥生時代には青銅器生産が知られる地域でもあり、多々良川対岸の土井遺跡群（福岡市)、多々良大牟田遺跡群（福岡市）では青銅器鋳型が出土している。粕屋町域でも、内橋坪見遺跡と内橋登り上り遺跡で青銅製鋤先、戸原鹿田遺跡で銅鏃、阿恵古屋敷遺跡では銅矛中子が出土している。青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。

このような地域的まとまりを背景に、古墳時代になると多々良川流域に前期前方後円墳である戸原

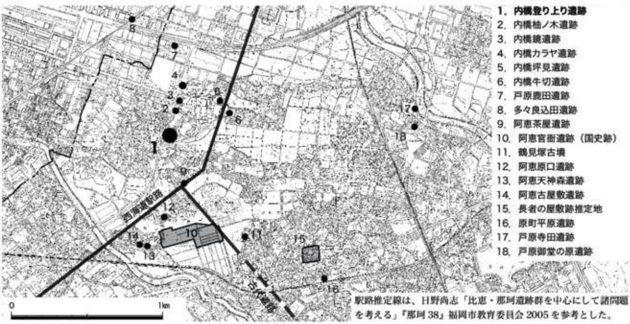


図１　内橋登り上り遺跡第７地点周辺図（1/25,000）

王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳（福岡市）が築造される。その後、中期には首長系譜が途切れるが、後期になると推定全長75m ほどの前方後円墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌『筑前国続風土記拾遺』に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、周溝を含めた全長約 86m、後円部南側に横穴式石室が開口して内部に石屋形が安置されていることをはじめ、墳丘形態・石室規模なども克明に読み取れる。これは那津官家の管掌者といわれる東光寺剣塚古墳（福岡市）と同規模・同主体部であり、『日本書紀』継体 22 年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

また、戸原寺田遺跡では、6 世紀後半から 7 世紀前半の鍛冶関連遺構のほか、紡いだ糸を巻き取る桛（かせ）の腕木が出土するなど、手工業に関わる集落が確認されていて、それに隣接する戸原御堂の原遺跡では同時期の倉庫群も見つかっている。ミヤケの時代の拠点的な集落の状況も明らかになりつつある。

粕屋町は、古代において筑前国糟屋郡に属し、須恵川下流域の阿恵官衙遺跡で糟屋評衙・郡衙が発見され国史跡に指定されている。

阿恵官衙遺跡は、7 世紀後半から 8 世紀後半にかけて、政庁と正倉という地方官衙の主要施設の全体像を捉えながら、評衙の出現から郡衙の最盛期に至るまで地方官衙の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、698 年の京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造舂米連廣國」により、評造名が判明している。まさに、阿恵官衙遺跡の政庁において「舂米連廣國」が評造として政務をおこなっていたことが特定された。

8 世紀前半に阿恵官衙遺跡の政庁が移転した後（正倉は 8 世紀後半まで残る）、郡衙の移転先はいくつか候補地がある。谷を隔てた北側の微高地上にある阿恵原口遺跡は、阿恵官衙遺跡の政庁と同じ方位の官衙建物が直交に配置されている。周辺にも官衙建物が展開している可能性がある。また、阿恵官衙遺跡の東方約 0.9kmの地点に 1 町四方の区画があり、『筑前国続風土記拾遺』では「長者の屋敷跡」と記されている。遺構は確認できていないが、区画の方位が阿恵官衙遺跡の政庁と同じであり、有力な候補地の一つである。さらに、「長者の屋敷跡」の南約 100m にある原町平原遺跡では、大型の建物跡が発見されている。建物の主軸方位が正方位をとり、阿恵官衙遺跡の正倉群と同じであることから、8 世紀後半の郡衙関連施設である可能性が高い。

また、阿恵官衙遺跡は官道が交差する衢（ちまた）に立地することが明らかで、そのうちの駅路は大宰府と都を結ぶ大路であり、この駅路沿いに内橋坪見遺跡が位置する。大宰府式鬼瓦、赤色顔料が付着した隅切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群と囲繞施設をともなうことから、駅家（夷守駅（ひなもり））の可能性が高いと考えられる。

粕屋町周辺は、郡衙、駅家、官道、港、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域である。

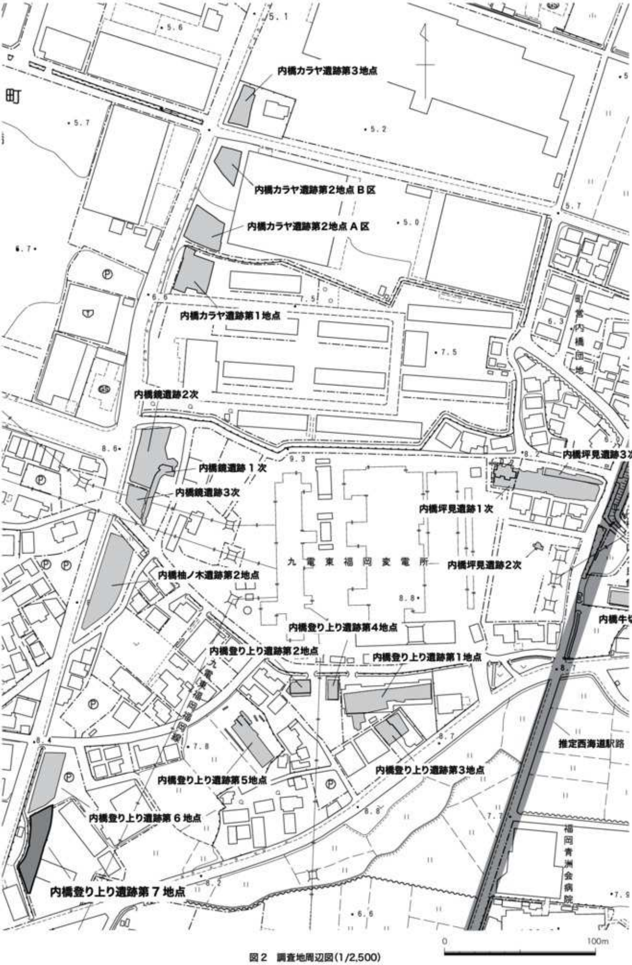


図２　調査地周辺図（1/2,500）

調査成果

調査成果

遺構：掘立柱建物（SB）２棟、土坑（SK）２基、溝状遺構（SD）６条、その他の遺構（SX）13基、多数のピット等。

遺物：６世紀末～７世紀前半、８世紀中頃～後半の２時期を中心とする須恵器、赤焼土器、土師器等を中心に、新羅土器や朝鮮半島系の軟質土器等を含む。

特記事項：SK3、SX20（SD2）、SX11、SX13、SX14とそれらを覆う包含層中より、獣骨（馬歯を含む馬骨等）を多数検出。

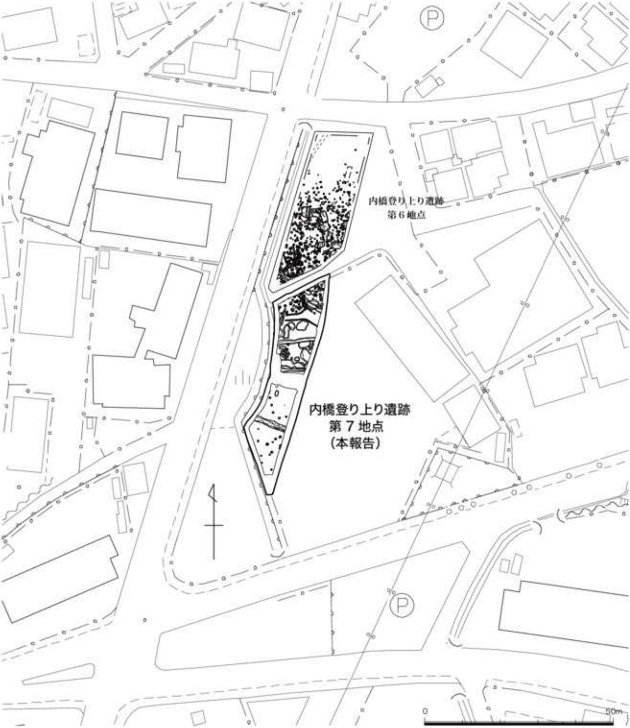


図３　内橋登り上り遺跡第７地点周辺図(1/1,000)

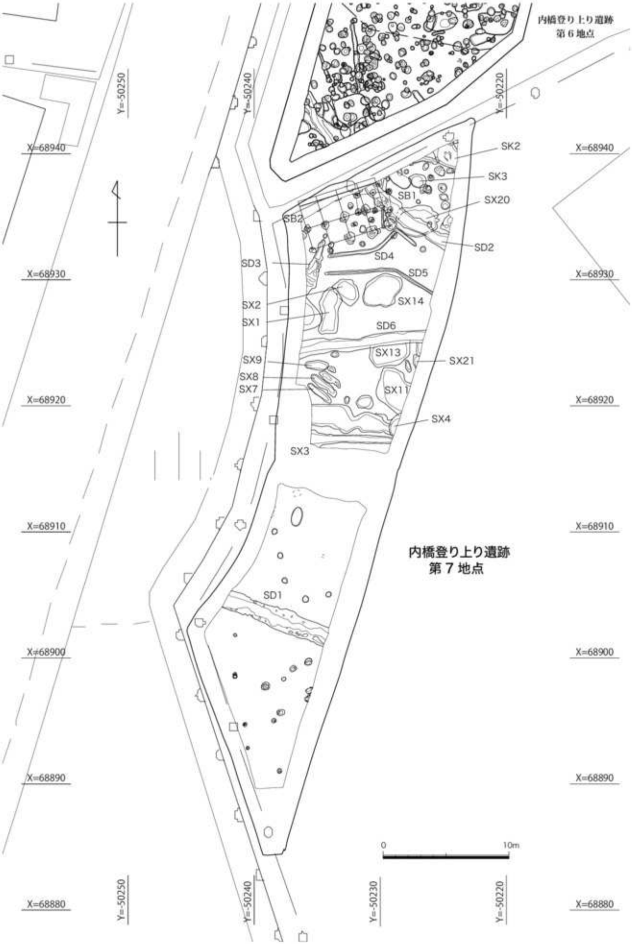


図４　内橋登り上り遺跡第７地点全体図(1/300)

遺跡の概要

本遺跡は、標高約6mを測る微高地上に立地しており、6世紀末～7世紀前半と8世紀中頃～後半の2つの時期を中心とする集落遺跡で、一部の遺構のみ中世に下る。調査区は、令和2年度に調査を実施した内橋登り上り遺跡第6地点の南側に接しており、掘立柱建物（SB）2棟、土坑（SK）2基、溝状遺構（SD）6条、その他の遺構（SX）13基と多数のピット等を検出。また、本遺跡のSD2と内橋登り上り遺跡第6地点のSD4は同一遺構で、一続きの溝状遺構となる。

今回、7世紀前後を中心とする須恵器、赤焼土器、土師器とともに新羅土器、軟質系土器の小壺や有溝把手付土器、縄目のタタキメを施した甕（鉢）等の朝鮮半島系土器資料が出土した。また、SK3、SX20（SD2）、SX13、SX14とそれらの遺構を覆う包含層中から、獣骨（馬歯を含む馬骨）が多数検出され、特に、SK3、SX20（SD2）では、確実に獣骨と朝鮮半島系土器が共伴した。

掘立柱建物(SB)

SB1（図5）

桁行2間、梁行1間の建物でSD2を切る。桁行（P23～P25）2.55 m、梁行（P23～P28）1.43 mを測る。6本の柱穴は、いずれも柱痕跡が確認されており、径0.5 m～0.6 m、深さ0.27 m～0.37 mを測る。建物の主軸方位はN-4.9°-Wを示す。

SB1出土遺物（図6）

1 須恵器壺（瓶子）（P24）。胴部から底部付近の屈折部。残高4.3cm。調整等：外面タタキメ、内面当て具痕。**2** 須恵器壺（瓶子）（P27）。胴下方部。残高4.0cm、胴部径14.6cm。調整等：内外両面横ナデ。**3** 赤焼土器甕（P24）。残高6.2cm、頸部径15.5cm。調整等：外面縦位の平行タタキメ、内面同心円状の当て具痕。**4** 赤焼土器甕（P28）。残高5.7cm、頸部径14.0cm。調整等：外面縦位の平行タタキメ後ナデ、内面平行文当て具痕。

SB2（図5）

桁行4間、梁行2間の総柱建物でSD2に切られる。調査時は、柱穴規模の違いから2棟の建物と推定されたが、両建物間の距離、主軸方向、柱間等から1棟の建物と判断した。桁行（P33～P37）6.45 m、梁行（P37、P46、P47）3.3 m以上を測る。建物の主軸方位はN-18.1°-Wを示す。

SB2出土遺物（図6）

1 赤焼土器甕（P33）。口縁部が大きく外反し、肩部は直線的。口径12.0cm、残高5.3cm。調整等：外面斜位の平行タタキメ、内面横位の平行文当て具痕 (2)。**2** 須恵器椀（P34）（金属器模倣）。口縁下方部が若干屈折し、体部に3条の沈線を配す。口径12.0cm、残高3.5cm。調整等：体部の内外両面にヨコナデ。**3** 須恵器提瓶（P34）。胴部片で内面中央に円形の貼付痕を有す。残高9.4cm。調整等：外面渦巻き状のカキメ、内面ナデ。**4** 赤焼土器甕（P34）。口縁部は外反し、口縁端部は上下に突出する。口径17.0cm、残高7.0cm。調整等：外面縦位の平行タタキメ、内面同心円状の当て具痕。**5** 土師器高杯（P36）。体部下方が屈折する。残高4.9cm。調整等：内外両面ナデ。

土坑(SK)

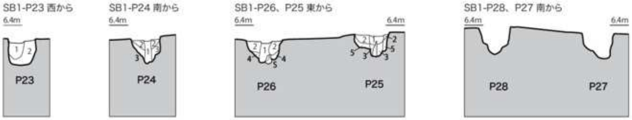
SK1は欠番。

SK2（図7）

遺構の一部が調査区外に及ぶため形状は不明。中央がピット状に窪む。東西1.9 m。最深部0.4 mを測る。

SK2出土遺物（図8）

1 須恵器杯蓋。擬宝珠状のつまみ。体部はやや高く緩やかに湾曲し、口縁端部は玉縁状で内面が少し窪む。口径15.4cm、器高3.1cm、つまみ径2.0cm、つまみ高1.0cm。調整等：天井部外面回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部内外両面ヨコナデ、天井部内面ナデ。**2** 須恵器杯蓋。扁平なボタン状のつまみ。体部は低く直線的、口縁端部は玉縁状で内面が少し窪む。口径17.8cm、器高2.6cm、つまみ径0.8cm、つまみ高0.7cm。調整等：天井部内外両面ナデ、口縁部内外両面ヨコナデ。**3** 須恵器杯蓋。ボタン状のつまみ。体部は低く直線的、口縁端部は玉縁状で内面が少し窪む。口径15.0cm、器高1.8cm、つまみ径0.8cm、つまみ高0.6cm。調整等：天井部内外両面ナデ、口縁部内外両面ヨコナデ。**4** 須恵器杯蓋。体部は低く、口縁端部が直線的で下方へわずかに突出する。



1. 灰黄褐色土（10YR4/2）しまりあり。
2. にぶい黄褐色土（10YR5/4）5 地山ブロック少。固くしまる。
3. 黒褐色土（10YR3/2）地山ブロック混ざり少ない。しまりあり。
4. 褐灰色粘質土（10YR4/1） しまりあり。
5. にぶい黄褐色土（10YR5/4） 2より地山ブロック多。

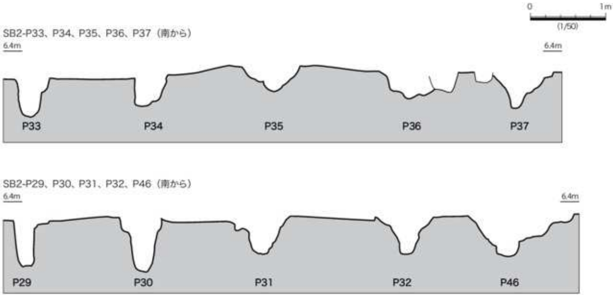


図5 SB-1、SB-2平面図(1/100)、土層図・断面図(1/50)

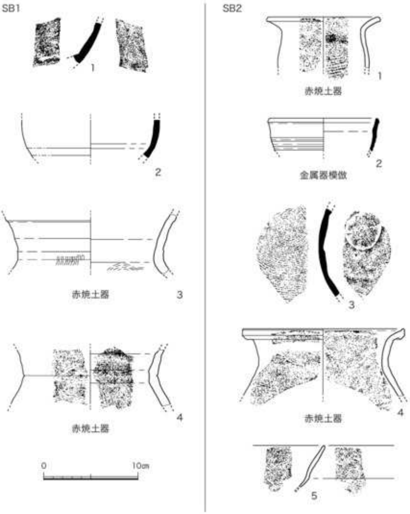


図6　SB1、SB2 出土遺物実測図（1/4）

口径 13.0cm、残高 1.5cm。調整等：外面自然釉により不明。口縁部内面ヨコナデ、天井部内面ナデ。**5** 須恵器杯蓋。体部は低平で直線的、口縁端部は屈曲し玉縁状を呈す。口径 14.0cm、残高 0.9cm。調整等：天井部内外両面ナデ、口縁部内外両面ヨコナデ。**6** 須恵器杯蓋。体部は低平で直線的、口縁端部は玉縁状で内面は平坦。口径 13.0cm、残高 1.1cm。調整等：天井部内外両面ナデ、口縁部内外両面ヨコナデ。**7** 須恵器杯身。口縁部は直線的に外反し、やや歪む。口径 12.0cm、器高 3.5cm、底径 7.9cm。口縁部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ。**8** 須恵器杯身。口縁部は直線的に外反する。口径 13.0cm、器高 3.7cm、底径 8.5cm。調整等：口縁部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ。**9** 須恵器皿（転用硯）。口縁部は斜め 45° 方向に外反。口径 18.0cm、器高 2.0cm、底径 14.0cm。調整等：口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部回転ヘラ切りの後ハケメ状工具によるナデ。なお、当資料は転用硯として使用、底部内面が磨滅し墨痕が観察される。**10** 須恵器高杯か。外反気味の口縁部は、高さ 0.9cm と低い。口径 19.4cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**11** 土師器甕。口縁部が緩やかに大きく外反。残高 9.1cm。調整等：外面縦位のハケメ、内面斜位のヘラケズリ。**12** 土師器甕。口縁部は大きく外反し、頚部が屈折して内面に稜線がめぐる。残高 6.0cm。調整等：外面縦位のハケメ、内面斜位のヘラケズリ。**13** 土師器甕。口縁部は大きく外反し、頚部が屈折して内面に稜線がめぐる。残高 4.1cm。調整等：外面ヨコナデ、口縁部内面カキメ状の横ナデ、頚部以下斜位のヘラケズリ。**14** 土師器甕。口縁部は短く、緩やかに外反する。残高 4.2cm。調整等：外面ナデ、内面斜位のヘラケズリ。**15** 土師器把手付土器。把手は小形で内面が大きく窪む。長さ 3.5cm、幅 2.1cm、厚さ 2.2cm。調整等：全面ユビオサエ、ユビナデ。

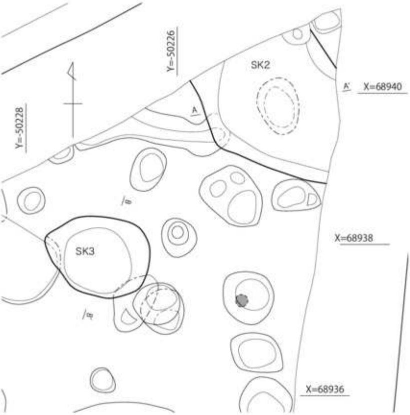
SK3（図7）

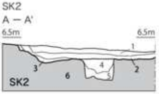
平面形は、円形を基本とするが、西側が外方へ突出する。東西 1.43 m。南北 1.07 m、深さ 0.35 m を測る。

特記事項として、朝鮮半島系の軟質系土器、有溝把手付土器と獣骨が出土。

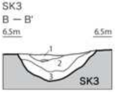
SK3 出土遺物（図9）

1 須恵器杯蓋。口縁部に屈折の稜線。残高 1.8cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**2** 須恵器杯身。立ち上りが短い。口径 11.4cm、器高 3.4cm、受部径 13.2cm、立ち上り高 0.6cm。調整等：体部上半の内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部外面回転ヘラケズリ。**3** 須恵器杯身。立ち上りが短い。口径 10.2cm、残高 1.9cm、受部径 12.6cm、立ち上り高 0.5cm。調整等：口縁部内外両面ヨコナデ。**4** 赤焼土器甕。口縁部は大きく外反。残高 4.9cm。調整等：剥落のため不明。**5** 軟質系土器の甕（鉢）。胴部下半の破片で、残高 5.3cm。





1. にぶい黄橙色土（10YR7/4）鉄分が混じる。
2. 褐色粘質土（10YR4/4）鉄分がまざる炭が斑状に混じる。
3. 褐色粘質土（10YR4/4）黄褐色土（10YR5/8）がブロック状に混じる。
4. 褐色粘質土（10YR4/4）地山ブロックで混じる。鉄分が少量混じる。ピット
5. 灰黄褐色粘質土（10YR4/2）鉄分が微量に混じる。ピット
6. 明黄褐色土（10YR6/8）地山



1. 褐色土 (10YR4/4) ややしまる。
2. 褐色粘質土（10YR4/6）上層に鉄分を多く含む。
3. 暗褐色粘質土（10YR3/3）小さめのブロックで地山が混じる。

図７　SK2、SK3 平面図、土層図 (1/50)

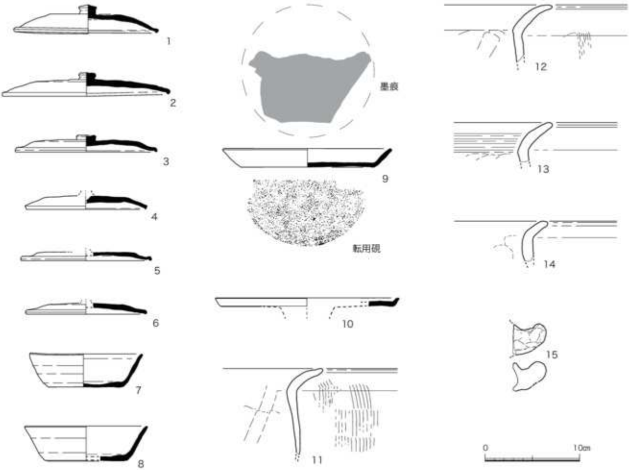


図８　SK2 出土遺物実測図(1/4)

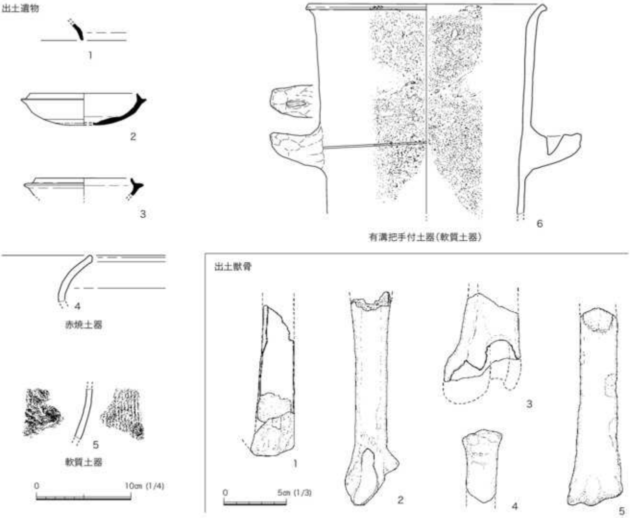


図9　SK3 出土遺物実測図 (1/4)、出土獣骨実測図 (1/3)

調整等：外面縄目（Lr）による縦位のタタキメ、内面同心円状の当て具痕。色調：灰褐色。胎土、焼成ともに良好。6 有溝把手付土器（軟質系土器）。口縁部が外方に屈折、有溝把手を有し、胴部中央に1条の沈線を配した甑と考えられる。口径 25.4cm、残高 22.3cm、把手の長さ 5.0cm、幅 3.5cm、厚さ 3.4cm、溝の長さ 2.2cm、幅 0.6cm、深さ 2.0cm。調整等：外面ナデ、一部縦位の平行タタキメが残る。内面同心円状の当て具痕。色調：橙色～赤褐色。胎土：石英粒を多く含む。焼成：良い。

SK3 出土獣骨（図 9）

※各骨部位の名称は、遺物調査技術研究室松井章編 2006『動物考古学の手引き』独立行法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センターを参照したもので、専門的鑑定等を経たものではない。

1 橈骨・尺骨 1 点（残存長 12cm・残存幅 3.5cm）、2 脛骨 1 点（残存長 17cm・残存幅 3cm）、3 上腕骨 1 点（残存長 7.2cm・残存幅 6cm）、4 中手骨 1 点（残存長 5.7cm・残存幅 3.1cm）、5 中足骨 1 点（残存長 15.6cm・残存幅 4.5cm）。

計 5 点出土。

溝状遺構 (SD)

SD1（図 10）

調査区南側に位置し、流路は東西方向を示す。断面形は、逆台形を呈し、残存長 8.5 m、幅 1.8 m、深さ 0.30 m～ 0.34 mを測る。

SD1 出土遺物（図 11）

1 須恵器杯身。口径 11.0cm、残高 2.5cm、受部径 13.2cm、立ち上り高 0.7cm。調整等：内外両面ヨコナデ。2 須恵器杯蓋。体部は低平で厚みがあり、口縁端部が下方にわずかに突出する。口径 14.0cm、残高 1.1cm。調整等：

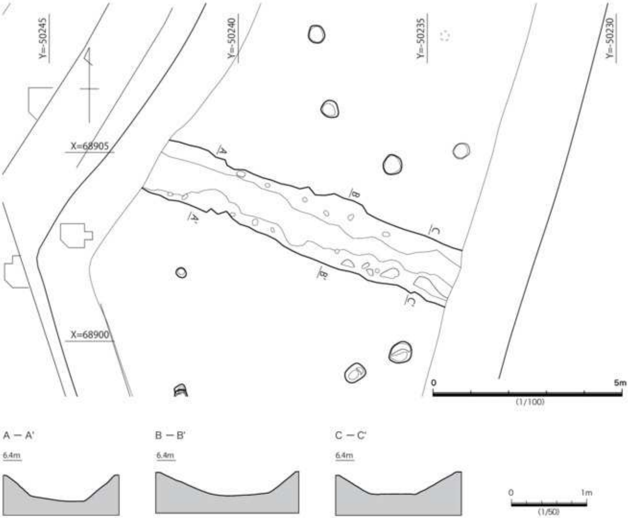


図 10　SD1 平面図（1/100）、断面図（1/50）

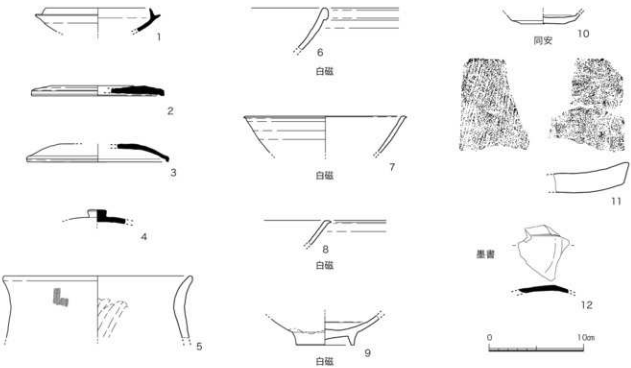


図 11　SD1 出土遺物実測図（1/4）

口縁部付近のみヨコナデ、それ以外ナデ。**3** 須恵器杯蓋。体部は高く丸味を有し、口縁端部は嘴状を呈す。口径 15.0cm、残高 3.9cm。調整等：口縁部内外両面ヨコナデ、天井部内外両面ナデ。**4** 須恵器杯蓋。円筒状のつまみ部。つまみ径 2.0cm、つまみ高 0.8cm。調整等：天井部内外両面ナデ。**5** 土師器甕。口縁部は緩やかに外反し直口に近い。口径 20.0cm、残高 6.5cm。調整等：外面縦位ハケメ、内面斜位ヘラケズリ。**6** 白磁椀。玉縁口縁。残高 6.4cm、色調：灰白色、胎土：黒色粒子を少量含み細かな気泡状の孔が多い。**7** 白磁椀。口縁端部が突出。口径 17.2cm、残高 3.9cm。色調：灰白色。胎土：灰白色で良好、細かな気泡状の孔が少し見られる。**8** 白磁椀。口縁端部が突出。残高 2.5cm。色調：灰白色。胎土：灰白色で良好、細かな気泡状の孔が見られる。**9** 白磁椀。高台付近で、底部中央が厚く見込に沈線状の段。底径 6.2cm、残高 3.1cm、高台高 1.3cm。色調：灰白色、釉は底部まで。胎土：灰白色で良好、細かな気泡状の孔が多い。**10** 青磁（同安窯系）皿。無文。底径 4.6cm、残高 1.1cm。色調：オリーブ灰色。施釉は内面、釉に気泡や斑点が見られる。胎土：良好。**11** 平瓦(須恵質)。長さ 9.6cm、幅 8.2cm。調整等：外面縄目のタタキメ、内面布目。色調：青灰色、胎土：粗い石英粒、黒色粒を含む。**12** 須恵器杯蓋（墨書土器）。残高 0.8cm。表面の 2 箇所に墨と目される黒色の線が存在する。

SD2（図 12）

調査区北側に位置し、流路は西北から東南方向へと緩やかな曲線を描く。高低差から東南方向が下流と考えられる。SX20 の中央部を大きく切る。断面形は、逆台形を呈し、長さ 8.1 m、深さ 0.16 ～ 0.24 mを測る。

SD2 出土遺物（図 14）

1 ～ 11(SD2)、**12 ～ 15**(SX20)

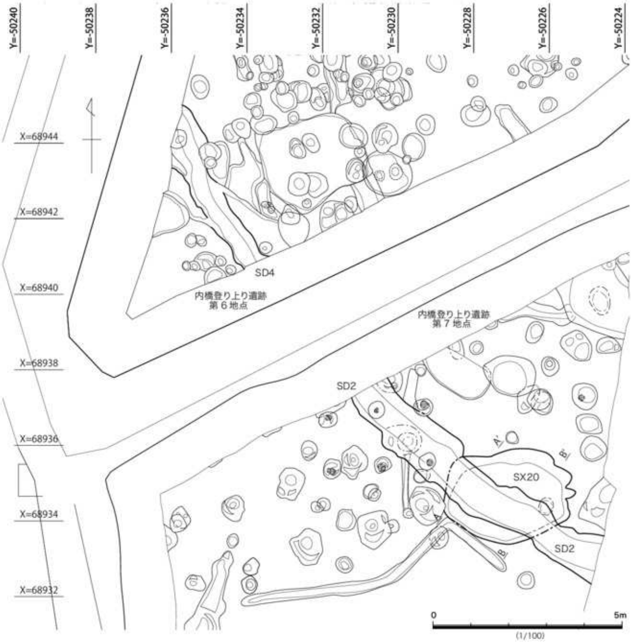
1 須恵器杯蓋（※ SX20 の本体に SD2 破片が接合）。器高は高く、全体に丸みを有し天井部は平坦。体部上部には、沈線状の段が残る。口径 12.6cm、器高 4.2cm。調整等：天井部外面回転ヘラケズリ、体部内外両面ヨコナデ、天井部内面ナデ。**2** 須恵器杯蓋。口縁部は、急傾斜で直線的に立ち上り、口縁端部を丸く収める。口径 13.6cm、残高 3.1cm。調整等：口縁部内外両面ヨコナデ。**3** 新羅土器（軟質土器）小壺。口縁部は強く外反し、口縁端部が玉縁状に肥厚する。口径 10.8cm、残高 2.5cm。調整等：内外両面とも風化剥落気味であるが、頸部付近の外面に縦位のタタキメ、内面の下方に当て具痕がかすかに観察される。色調：にぶい褐色。胎土：砂粒を多く含む。焼成：良い。**4** 土師器広口丸底壺。口縁部は開き、頸部が強く屈折する。口径 12.0cm、残高 6.4cm。調整等：口縁部内面横位のナデ。**5** 赤焼土器甕。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部の下方に 1 条の沈線がめぐる。口径 15.0cm、残高 7.7cm。調整等：頸部付近は輪積み痕か、沈線状に複数の段が残る。**6** 赤焼土器甕。胴部片で獣骨に接して出土。残高 6.2cm。調整等：外面縦位の平行タタキメ、内面横位の当て具痕。**7** 赤焼土器甕。口縁部は大きく外反し、肥厚する口縁端部の内面には段を有す。口径 22.8cm、残高 3.1cm。**8** 土師器高杯。口縁部は大きく開き、体部が屈折し段を成す。口径 16.2cm、残高 3.2cm。調整等：口縁部外面に横位の強いナデ、内面斜位のナデ。**9** 土師器丸底杯。口縁端部はわずかに内湾し、体部は屈折して内面に段を有す。口径 12.6cm、器高 4.6cm。調整等：内外両面斜位の暗文状のミガキ。**10** 有溝把手付土器（軟質系土器）。把手先端の 3 条の沈線は、中央の溝付近で 1 条となり溝に重なる。長さ 5.0cm、幅 3.6cm、厚さ 3.5cm、溝の長さ 2.0cm、幅 0.6cm、深さ 1.5cm。調整等：全体をユビオサエ、その後丁寧なナデ。把手基部に本体胴部の内面が残っており、同心円状の当て具痕が観察される。**11** 凹石。花崗片岩系の扁平礫を使用。中央部の表裏両面を凹面として使用。上下左右の 4 ヵ所には敲打痕があり、敲石として利用。長さ 12.3cm、幅 9.0cm、厚さ 3.0cm。

当遺構は、内橋登り上り遺跡第 6 地点の調査で検出された、SD4 と同一遺構と考えられ、8 世紀中頃～後半の時期と考えられる。しかし、今回の検出遺物は、7 世紀前後の遺物のみで、当該期の遺物は含まれず、獣骨（馬骨？）が多く検出された。

そこで、獣骨の検出状況（図 13）を観察すると、SD2 の流路内において、獣骨全てが SX20 想定範囲内、もしくはそれより下流に集中しており、それより上流部の検出例はない。

また、SD2 と SX20 の検出土器が互いに接合しており、調査担当者の説明では、土器類の検出範囲が獣骨と同様であったとのこと。

したがって、獣骨を含む検出遺物は、SD2 による SX20 掘削



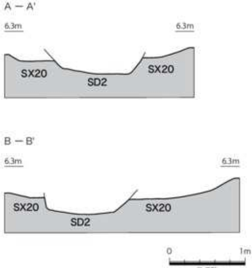


図 12　SD2、SX20 平面図(1/100)、断面図(1/50)

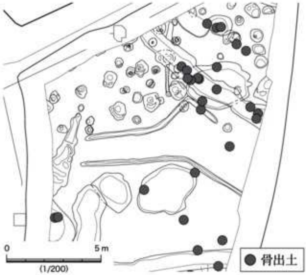


図 13　骨出土分布図 (1/200)

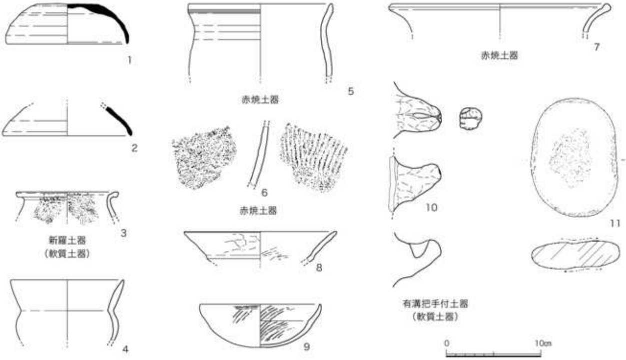


図14　SD2出土遺物実測図（1/4）

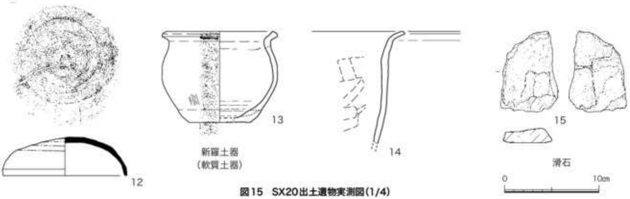


図15　SX20出土遺物実測図(1/4)

時、あるいは、SX20切断面から溝内に堆積した遺物で、水流によりSX20の範囲より下流に分布する獣骨等も含め、大半がSX20の遺物と判断する。そのため、SD2との関係を考慮し、SX20の遺構と遺物説明を併記する。

SX20（図12）

平面形は、隅丸長方形を呈し、東西に長軸をとる。中央付近をSD2に大きく切られる。長さ3.46m。幅2.5m、深さ0.20mを測る。

特記事項として、獣骨（馬骨？）約13点と新羅系軟質土器が出土。

SX20出土遺物（図15）

12 須恵器杯蓋。全体に丸みを有すが、部分的に歪む。口径13.0cm、器高4.0cm。ヘラ記号。調整等：天井部及び体部外面回転ヘラケズリ、口縁部内外両面ヨコナデ、天井部内面ナデ。**13** 新羅土器（軟質土器）小壺。口縁部は緩やかなくの字状、口縁端部は肥厚する。胴部は張っており、底部は平底。口径12.2cm、器高9.6cm、底径6.6cm。調整等：外面の一部に縦位の平行タタキメが残る。また、内面にも当て具痕が存在したと考えられるが、内外両面とも丁寧にナデ消されている。色調：褐灰色、頚部付近は橙色。胎土：微細～2㎜の白色粒子を非常に多く含む。焼成：良好。**14** 土師器甕。口縁部は緩やかに大きく外反、胴部の張は弱く下方へとすぼまる。残高11.9cm。調整等：外面斜位のナデ、内面ヘラケズリ。**15** 滑石の素材。亜角礫の原材から剥離。表面の一部に研磨痕。長さ10.5cm、幅6.0cm、厚さ1.5cm。

SX20出土獣骨（図16）

1 馬歯1点（残存長6.1cm・残存幅2.4cm）、**2** 下顎骨（a 残存長9.2cm・残存幅5.6cm）

図16　SX20出土獣骨実測図(1/3)

3肩甲骨（c残存長8.0cm・残存幅7.0cm）、4寛骨（残存長16.6cm・残存幅6.0cm）、5寛骨（残存長19.6cm・残存幅6.0cm）、6大腿骨（残存長3.3cm、残存幅4.2cm）、7大腿骨（残存長9.7cm、残存幅5.9cm）、8大腿骨（残存長14.8cm、残存幅5.6cm）、9脛骨（長さ38.1cm、最大幅7.0cm）、10中足骨（長さ26.5cm、最大幅4.8cm）、11中足骨（長さ26.5cm、最大幅5.0cm）、12中手骨（残存長18.5cm、残存幅3.6cm）、13不明骨（残存長5.9cm、残存幅4.9cm）

計13点出土。

SD3（図17）

調査区北側に位置し、流路は南北方向を示す。底部が凹凸をなす。断面形は、逆台形を呈し、長さ4.6m、幅0.4～0.86m、深さ0.14～0.30mを測り、南側が広く深い。

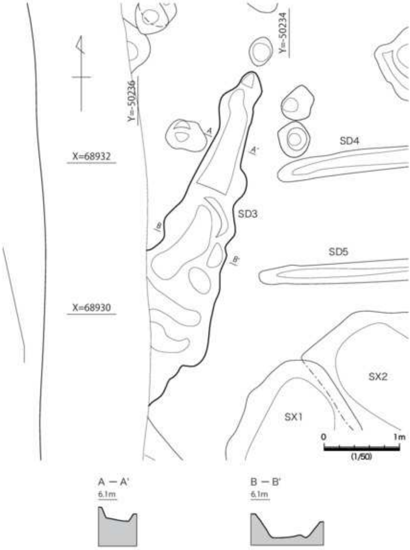


図17　SD3平面図、断面図(1/50)

SD3出土遺物（図18）

1須恵器杯蓋。口縁は屈折して稜線を描き、体部は直線的にのびる。杯身の可能性もあるが、屈折部の角度がやや緩やかな点から蓋と判断した。口径11.2cm、残高1.7cm。調整等：内外両面ヨコナデ。2須恵器杯蓋。口縁部でかえりが付く。残高1.0cm。調整等：内外両面横ナデ。3須恵器杯蓋。口縁部でかえりが付く。残高1.4cm。調整等：内外両面ヨコナデ。4須恵器杯身。全体に小ぶり。口径10.0cm、残高2.5cm、受部径12.0cm、立ち上り高0.8cm。調整等：内外両面ヨコナデ。5須恵器杯身。4と同様に小ぶり、口径10.0cm、残高2.5cm、受部径12.4cm、立ち上り高0.95cm。調整等：内外両面ヨコナデ。6須恵器高杯か。金属器模倣椀の可能性も考えられる。口縁部は外反し、体部に2条の沈線。口径12.7cm、残高3.0cm。調整等：口縁部の内外両面ヨコナデ。7須恵器杯身。体部は外反し、細身の高台を付す。底径7.0cm、残高2.2cm、高台高0.4cm、高台幅0.4cm。調整等：体部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ。8新羅土器蓋（陶質）。つまみは円柱状で高く、丸みのある頭部の上端は平坦となり、蓋部は低い逆円錐状を呈す。口径8.5cm、器高2.6cm、つまみ径1.5cm。つまみ高2.0cm。調整等：体部外面は自然釉で調整不明。内面ヨコナデ。色調：青灰色、断面赤紫色。胎土・焼成：良好。9須恵器甕。口縁部は外反し、屈曲した口縁端部の外面に2条の沈線。口径13.0cm、残高3.5cm。10須恵器甕。胴下半部片。残高4.5cm。調整等：外面斜位の細いタタキメの後カキメ。内面横位の平行文当て具痕。11須恵器甕。胴下半部片。残高6.2cm。調整等：外面斜位の擬格子状タタキメ。内面横位の平行文当て具痕。12須恵器高杯。脚部片。残高4.7cm、径3.0cm。長方形スカシ孔3箇所とその下方に1

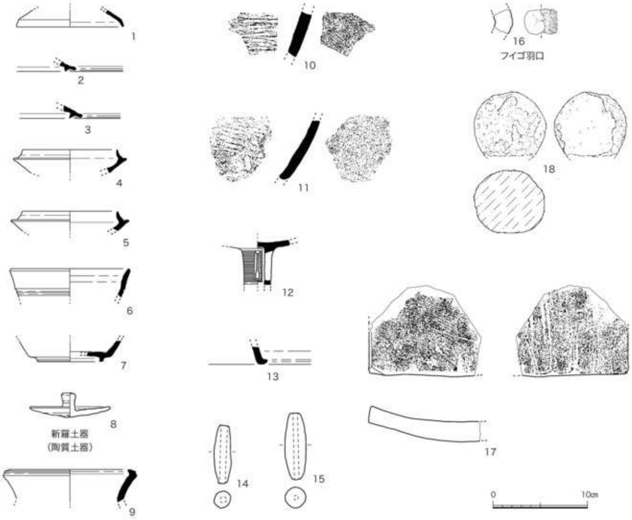


図18　SD3出土遺物実測図（1/4）

条の沈線。外面カキメ。**13** 須恵器高杯。脚部片で端部が屈折。残高1.1cm。調整等：内外両面ナデ。**14** 土錘。長さ6.1cm、径1.8cm、孔径0.6cm。黒班が観察される。**15** 土錘。長さ7.0cm、径2.2cm、孔径0.5cm。**16** フイゴ羽口。先端部でガラス質の付着物が観察される。残存長3.4cm。**17** 平瓦。調整等：外面縄目のタタキメ、内面布目。残存長9.4cm、残存幅11.8cm、厚さ2.2cm。色調：褐灰色。胎土：1〜2㎜の石英粒を多く含む。焼成：良い。**18** 敲石。花崗岩系の円礫を使用、下端部を欠く。長さ6.7cm、幅7.6cm、厚さ6.5cm。

SD4（図19）

調査区北側に位置し、流路は東西方向を示す。中央付近は湾曲し東側がくの字状に屈折する。断面形は逆台形を呈し、長さ7.0 m、幅0.26〜0.32 m、深さ0.04〜0.08 mを測る。

SD4出土遺物（図19）

1 赤焼土器甕。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部がやや尖る。残高4.1cm。調整等：外面横位の平行タタキメ、内面ナデ。

SD5（図19）

調査区北側に位置し、流路は東西方向を示し、SD4に並行する。中央付近から湾曲し、東側が調査区外に続く。断面形は、逆台形を呈し、長さ8.7 m、幅0.20〜0.28 m、深さ0.10m〜0.12 mを測る。

SD5出土遺物（図19）

1 須恵器𤭯。上半部片、頚部がやや短く安定感がある。口径11.8cm、残高6.7cm。ヘラ記号。調整等：内外両面ヨコナデ、頚部下方カキメ。

SD6（図19）

調査区中央付近に位置し、流路は東西方向を示す。断面形は緩やかに底が外湾する逆台形を呈し、長さ10.0 m、幅0.94〜1.24 m、深さ0.20m〜0.28 mを測る。

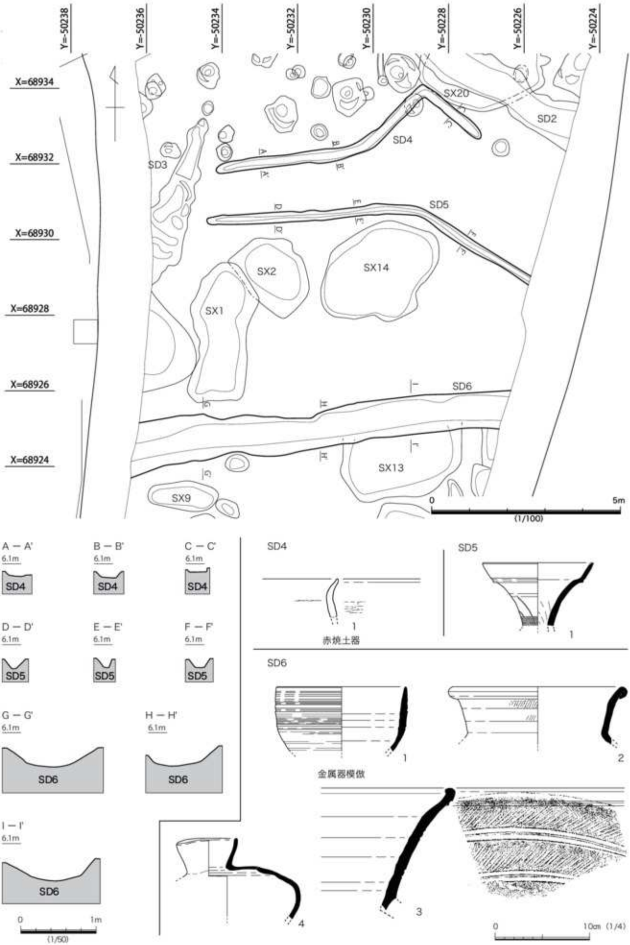


図 19　SD4、SD5、SD6 平面図（1/100）、断面図（1/50）、出土遺物実測図（1/4）

SD6 出土遺物（図 19）

1 須恵器椀（金属器模倣）。口縁部は直立し、胴部に 3 条の沈線を配し、体部中程にはカキメを施す。口径 13.8cm、残高 6.8cm。調整等：内面ヨコナデ。2 須恵器甕。口縁部は、先端を折り返して玉縁状に肥厚させる。口径 19.0cm、残高 6.1cm。調整等：頚部外面に斜位の平行タタキメの後ヨコナデ、内面にはヨコナデ。3 須恵器甕。口縁部は、先端を内側に屈折させ内面を凹面とする。口縁端部は、外面に 1 条の沈線、その下に細い突帯を 1 条付す。口縁部外面は、2 条 1 組の沈線を 2 箇所に配し、その間を斜線文で充填する。残高 12.9cm。調整等：内外両面ヨコナデ。4 須恵器平瓶。口縁部が若干歪む。口径 6.6cm、残高 8.5cm、頚部径 3.3cm。

不明遺構（SX）

SX5、SX6、SX10、SX12、SX15、SX16、SX17、SX18、SX19 は欠番。

SX1（図 20）

平面形は隅丸長方形を呈し、SX2に切られる。断面形は逆台形。長さ2.1 m、幅1.6 m、深さ0.16 m。

SX1 出土遺物（図 21）

1 須恵器杯身。立ち上りは内傾し、先端が尖る。口径 11.0cm、残高 2.9cm、受部径 13.4cm、立ち上り高 0.7cm。調整等：内外両面ヨコナデ。2 赤焼土器甕。口縁部は緩やかに大きく外反する。口縁端部に 1 条の突帯。調整等：内外両面ヨコナデ。

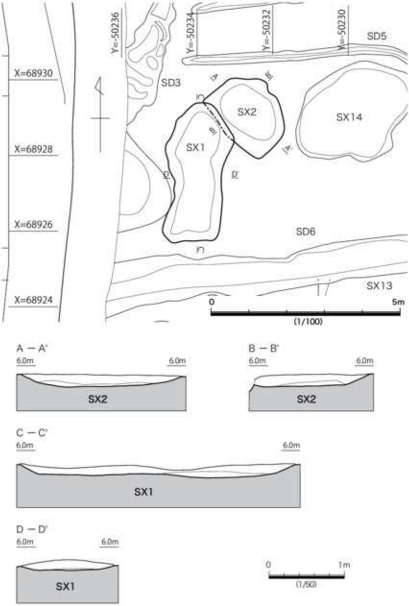


図20　SX1、SX2平面図(1/100)、断面図(1/50)

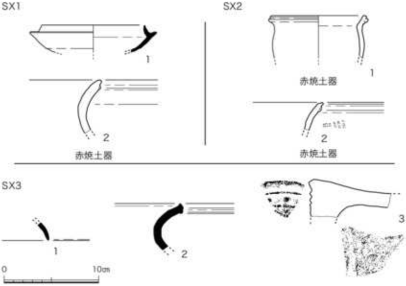


図21　SX1、SX2、SX3 出土遺物実測図（1/4）

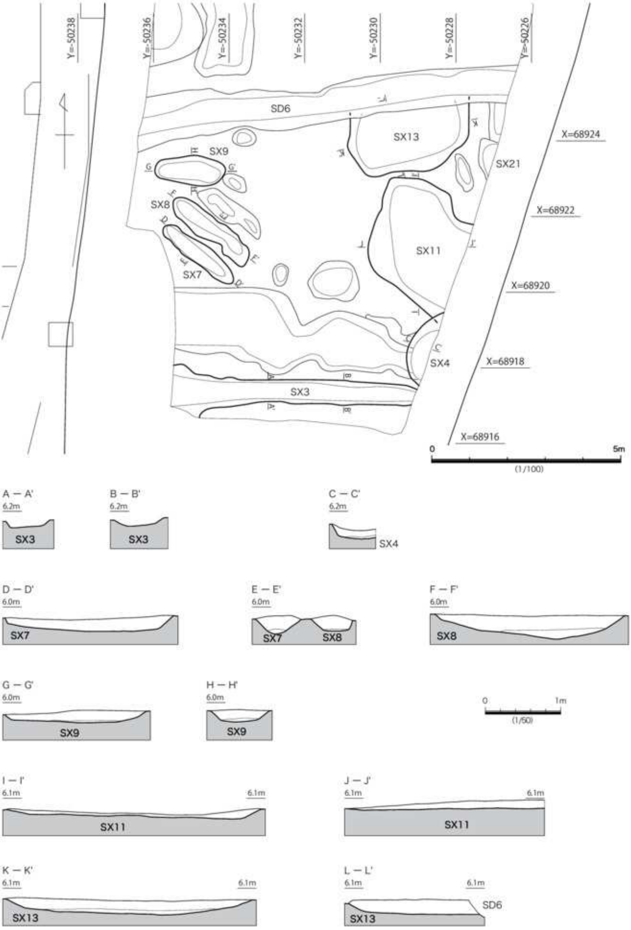


図 22　SX3、SX4、SX7、SX8、SX9、SX11、SX13 平面図(1/100)、断面図(1/50)

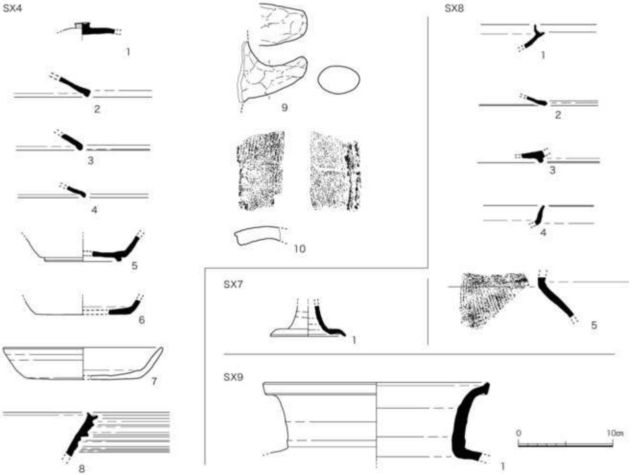


図 23　SX4、SX7、SX8、SX9 出土遺物実測図（1/4）

SX2（図 20）

平面形は隅丸長方形状を呈し、SX1 を切る。断面形は逆台形。長さ 3.7 m、幅 1.5 ～ 1.8 m、深さ 0.14 m。

SX2 出土遺物（図 21）

1 赤焼土器甕。口縁部は外反し、口縁端部に 1 条の突帯。口径 10.2cm、残高 4.5cm。調整等：器面風化のため不明。**2** 赤焼土器甕。口縁部は外反し、口縁端部に 1 条の突帯。残高 2.9cm。調整等：不鮮明ながら下方に縦位の平行タタキメ、内面にはヨコナデ。

SX3（図 22）

形状は溝状遺構で、断面形は逆台形。長さ 9.8 m、幅 0.58 ～ 0.66 m、深さ 0.10 m。

SX3 出土遺物（図 21）

1 須恵器杯蓋。口縁部は緩やかに内湾し、先端が尖り気味となる。残高 1.9cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**2** 須恵器甕。口縁部は大きく外反し、口縁端部を肥厚させ沈線を配す。残高 4.9cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**3** 軒丸瓦。外区朱文 2 個が確認される。長さ 8.6cm、高さ 4.0cm。調整等：内面布目。

SX4（図 22）

平面形は円形、断面形は逆台形を呈すと考えられるが、大半が調査区外となっており、SX11 を切る。現況で長さ 2.0 m、幅 0.6 m、0.18 m を測る。

SX4 出土遺物（図 23）

1 須恵器杯蓋。天井部付近の破片で、扁平なつまみを付す。残高 1.2cm、つまみ径 1.1cm、つまみ高 0.6cm。調整等：天井部内外両面ナデ。**2** 須恵器杯蓋。口縁端部は嘴状を呈し、内面は沈線状に窪む。残高 2.1cm、調整等：内外両面ヨコナデ。**3** 須恵器杯蓋。口縁端部は丸味を帯びた嘴状を呈し、内面は段状となる。残高 1.7cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**4** 須恵器杯蓋。口縁端部は形骸化した嘴状を呈し、内面は少し窪む程度。残高 1.2cm、調整等：内外両面ヨコナデ。**5** 須恵器杯身。

体部は外反し、高台は低く、きゃしゃで外方に開く。底径 8.2cm、残高 2.7cm、高台高・幅ともに 0.5cm。調整等：体部の内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ。**6** 須恵器杯身。無高台で体部は外反する。底径 10.0cm、残高 1.4cm。調整等：底部内外両面ナデ。**7** 土師器杯身。口縁部は外反し、口縁端部を丸く納める。口径 17.0cm、底径 11.7cm、器高 3.4cm。調整等：器面風化のため不明。**8** 須恵器甕。口縁部は上端部を凹面とし、両端を細くつまみ出し、外面を鋸歯状に凹凸をつける。残高 4.7cm。調整等：内面ヨコナデ。**9** 土師器把手付土器。把手は牛角状で、断面形は横長な楕円形状。長さ 6.5cm、幅 4.4cm、厚さ 3.0cm。調整等：全面にユビオサエ、ユビナデ。**10** 熨斗瓦。長さ 8.8cm、幅 5.0cm。調整等：外面縄目のタタキメ、内面布目。

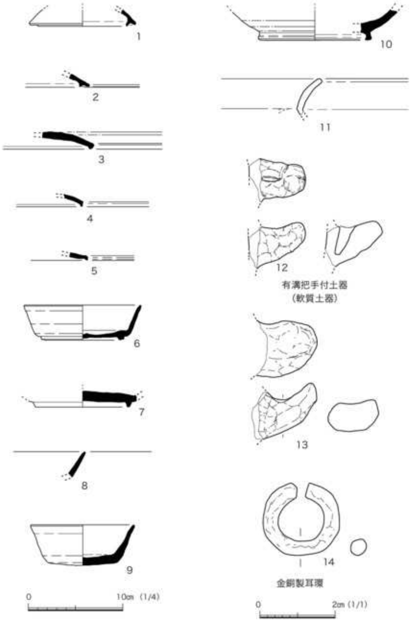


図 24　SX11 出土遺物実測図 1 ～ 13（1/4）、14（1/1）

SX7（図 22）

平面形は溝状、断面形は逆台形を呈す。長さ 2.2 m、幅 0.54 m、深さ 0.14 mを測る。

SX7 出土遺物（図 23）

1 須恵器高杯。短脚で底部先端が湾曲する。底径 8.0cm、残高 3.2cm。調整等：内外両面ナデ。

SX8（図 22）

平面形は溝状、断面形は逆円錐状を呈す。長さ 2.5 m、幅 0.60 m、深さ 0.20 mを測る。

SX8 出土遺物（図 23）

1 須恵器杯身。立ち上りが屈折気味に直立する。残高 2.5cm 立ち上り高 0.8cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**2** 須恵器杯蓋。口縁端部は丸く直線的となる。残高 1.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**3** 須恵器杯身。高台はきゃしゃで低い。残高 1.2cm、高台高・幅ともに 0.5cm。調整等：内外両面ナデ。**4** 須恵器杯身。口縁部は外反する。残高 2.1cm。調整等：内外両面ナデ。**5** 須恵器甕。肩部片で外面は自然釉がかかる。残高 4.3cm。調整等：外面縦位のタタキメの後カキメ、内面平行文当て具痕。

SX9（図 22）

平面形は溝状、断面形は逆台形を呈す。長さ 1.84 m、幅 0.78 m、深さ 0.14 mを測る。

SX9 出土遺物（図 23）

1 須恵器甕。口縁部は外反し、口縁端部が上下に突出する。口径 24.0cm、残高 8.3cm。調整等：内外両面ヨコナデ、内面下端に当て具痕。

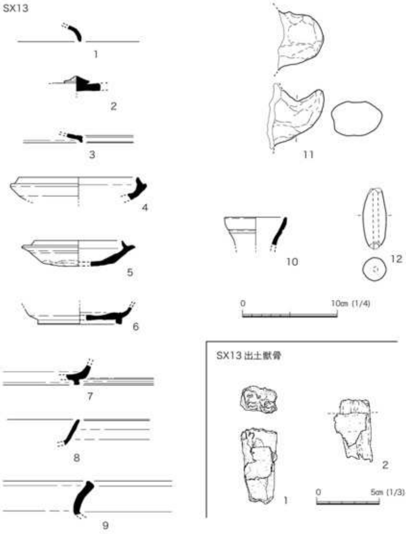


図25　SX13出土遺物実測図（1/4）、出土獣骨実測図（1/3）

SX11（図22）

平面形は不整形、調査区外にのびる。現況で長さ3.2 m、幅2.6 m、深さ0.02～0.1 mと極めて浅い。

SX11出土遺物（図24）

1須恵器杯蓋。全体に丸みを帯びるようで、内面にかえりを持つ。口径9.4cm、受部径11.3cm、残高1.7cm。調整等：内外両面ヨコナデ。2須恵器杯蓋。内面にかえりを持つ。残高1.4cm。調整等：内外両面ヨコナデ。3須恵器杯蓋。全体に低平で、口縁端部は嘴状を呈す。残高1.8cm。調整等：口縁部内外両面ナデ。4須恵器杯蓋。口縁端部は鋭利な嘴状を呈す。残高1.3cm。調整等：口縁部内外両面ヨコナデ。5須恵器杯蓋。口縁端部は嘴状を呈す。残高1.3cm。調整等：口縁部内外両面ヨコナデ。6須恵器杯身。口縁部はやや外反し、高台は低く若干丸みを帯びる。口径12.4cm、器高3.7cm、底径8.7cm、高台高0.3cm、高台幅0.7cm。調整等：体部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ。7須恵器杯身。高台部片でやや厚く、高台は逆台形状を呈す。底径10.0cm、残高1.7cm、高台高0.5cm、高台幅0.7cm。調整等：底部内面ナデ、底部回転へラ切り後ナデ。8須恵器杯身。口縁部は外反し、口縁端部が尖り気味となる。残高2.7cm。調整等：内外両面ヨコナデ。9須恵器杯身。口縁部は外反し、底部はやや外方に張る。口径11.0cm、器高4.3cm、底径7.3cm。調整等：体部の内外面及び底部内面ナデ、底部回転へラ切り後ナデ。10須恵器壺。底部付近は丸みを帯び、高台が外方に張り出す。底径12.0cm、残高3.0cm、高台高0.9cm、高台幅0.7cm。調整等：外面回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ。11土師器甕。口縁部は外反し、頚部内面屈折し稜線となる。残高3.8cm。調整等：内外両面ナデ。12有溝把手付土器（軟質系土器）。把手先端部に沈線状のくぼみ、中央部には溝を穿つ。長さ6.0cm、幅3.8cm、厚さ4.0cm、溝長さ1.8cm、幅0.4cm、深さ3.0cm。全体にユビオサエ、丁寧なユビナデ。13土師器把手付甕の把手か。形状は扁平で幅広、上部が凹面を呈す。長さ6.9cm、幅6.0cm、厚さ3.0cm。調整等：全体にユビオサエ、ユビナデ。14金銅製耳環。銅芯に金箔を施すが、腐食により表面の大半が剥がれ緑青をふく。径1.9～2.0cm、断面径0.4cm。

SX13（図22）

平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は隅丸の逆台形状を呈し、北側をSD6に切られる。長さ3.2 m、幅1.6 m、深さ0.20 mを測る。

特記事項として、獣骨2点が出土。

SX13出土遺物（図25）

1須恵器杯蓋。口縁部は丸みを帯びて立ち上る。残高1.7cm。調整等：内外面ヨコナデ。2須恵器杯蓋。擬宝珠状の扁平なつまみ。残高1.6cm、つまみ径2.7cm、つまみ高0.8cm、3須恵器杯

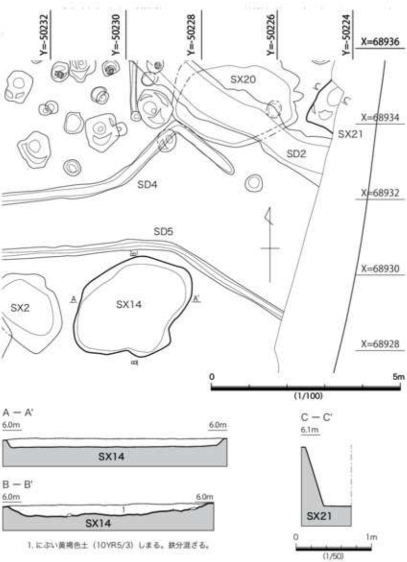


図26　SX14、SX21 平面図(1/100)、断面図、土層図(1/50)

蓋。口縁端部は嘴状を呈す。残高1.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**4** 須恵器杯身。獣骨に接して出土。全体に厚手で丸みを帯びる。口径 12.6cm、残高 2.3cm、受部径 14.4cm、立ち上り高 0.7cm。調整等：内外両面ヨコナデ。色調：灰白色、胎土：良好。焼成：不良。**5** 須恵器杯身。全体に低く、立ち上り高が低い。口径 9.2cm、器高 2.7cm、受部径 12.0cm。立ち上り高 0.5cm。調整等：底部手持ちのヘラケズリ、体部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ。**6** 須恵器杯身。底部付近は丸みを帯び、高台は直立する。底径 8.7cm、残高 1.8cm、高台高 0.5cm、高台幅 0.5 ～ 0.7cm。調整等：底部内面ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ。**7** 須恵器杯身。底部付近の屈折面が稜線状をなし、きゃしゃな高台が外方に張り出す。残高 2.1cm、高台高及び幅は 0.6cm。調整等：内外両面ナデ。**8** 須恵器杯身。口縁部は外反し、口縁端部を丸く納める。残高 2.7cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**9** 須恵器平瓶。口縁部は外反し、口縁端部は内側に突出。残高 3.5cm。調整等：内外両面には自然釉がかかるため不明。**10** 須恵器平瓶。口縁部は若干内湾し、下方に 1 条の沈線。口径 6.6cm、残高 3.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**11** 土師器把手付甕の把手か。形状は幅広、上部が若干凹面を呈す。長さ 6.0cm、幅 5.4cm、厚さ 3.6cm。調整等：全体にユビオサエ、ユビナデ。**12** 土錘。長さ 6.5cm、径 2.5cm、孔径 0.5cm。

SX13 出土獣骨（図 25）

1 馬歯 1 点・下顎骨の一部が残存。（残存長 6.0cm・残存幅 2.8cm）、**2** 馬歯 1 点・下顎骨の一部が残存。（残存長 4.9cm・残存幅 3.0cm）

SX14（図 26）

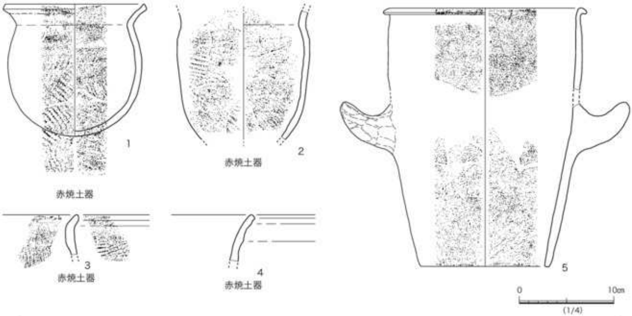
平面形は、北東から南西に長軸をとる楕円形を基本とし、南東方向の一部が方形に張り出す。断面形は緩やかな弓状を描く。長さ 3.5 m、幅 2.5 m、深さ 0.08 ～ 0.16 mを測る。

特記事項として、獣骨約 11 点が出土。馬骨（馬歯）10 点と牛骨 1 点。

SX14 出土遺物（図 27）

1 赤焼土器甕。口縁部がくの字状を呈し、丸底となる。口径 14.6cm、器高 14.0cm。調整等：口縁部内外両面ナデ、胴部外面斜位の擬格子状タタキメ、内面当て具痕。**2** 赤焼土器甕。頚部は直線的に立ち上り、胴部は砲弾状を呈す。残高 13.3cm、肩部径 14.0cm。調整等：胴部外面横位の平行タタキメ、内面平行文当て具痕。**3** 赤焼土器甕。口縁部は短く外反し、頚部内面が肥厚する。残高 4.2cm。調整等：外面横位の擬格子状タタキメ、内面平行文当て具痕。**4** 赤焼土器甕。口縁部は緩やかに外反し、外面に 2 条の稜線が平行し、凹凸状をなす。残高 4.9cm。調整等：内外両面ヨコ

SX14



SX14（獣骨）

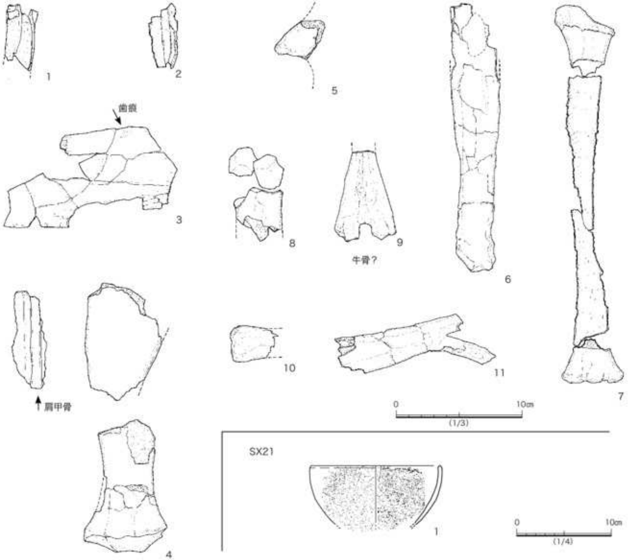


図 27　SX14、SX21 出土遺物実測図（1/4）、SX14 出土獣骨実測図（1/3）

ナデ。5土師器甑。口縁部は屈折し、口縁端部は丸みを帯びて下方に垂れ気味となる。胴部は円筒状に近く、牛角状の把手を付す。口径20.0cm、器高27.3cm、底径13.4cm。調整等：胴部外面縦位の平行タタキメ、それをナデ消した後カキメ。内面無文の円形当て具痕、それをヨコナデで消す。把手はユビオサエとユビナデ。

SX14出土獣骨（図27）

1馬歯1点（残存長5.3cm・残存幅2.8cm）、2馬歯1点（残存長5.2cm・残存幅2.3cm）。3下顎骨1点・一部歯槽骨部が存在（残存長13.7cm・残存幅8.0cm）。4肩甲骨1点・肩甲棘が存在（残存長13.7cm・残存幅8.0cm）。5橈骨・尺骨1点・肘突起部か（残存長4.0cm・残存幅3.0cm）。6橈骨・尺骨1点（残存長21.4cm・残存幅3.7cm）。7中足骨（残存長30cm・残存幅4.9cm）。8中足骨1点・距骨？2点（残存長6.0cm・残存幅4.0cm）。9牛の中足骨1点（残存長7.1cm・残存幅4.9cm）。10・11は不明骨。

SX20

SX20についてはP18にて記述。

SX21（図26）

平面形は方形か、遺構の大半が調査区外となっている。長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.76mを測る。

SX21出土遺物（図27）

1土師器杯。丸底の杯で、口縁部が直立する。口径13.6cm、残高6.3cm。調整等：外面横位のミガキ状のナデ（強いヨコナデか）、

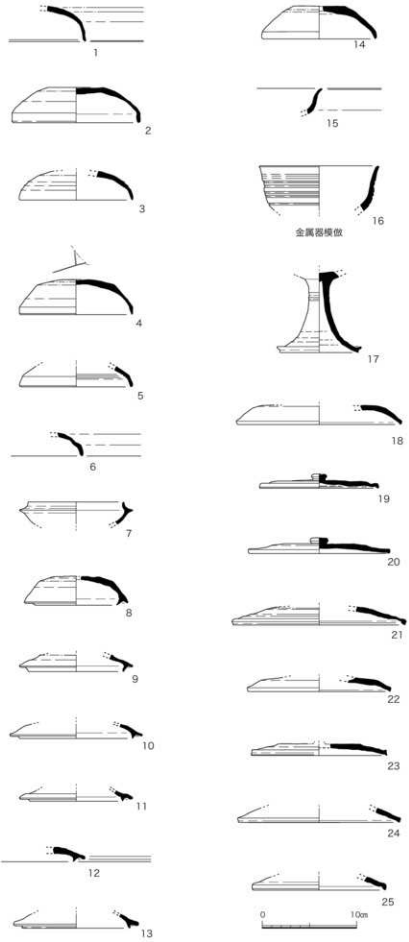


図28　包含層等出土遺物実測図1～25(1/4)

内面斜位のナデ。

包含層等出土遺物（図28～32）

ここでは、包含層出土遺物を中心に、試掘や表採の遺物を一括して示す。

1須恵器杯蓋。全体に丸みを帯び、器高が高い。口縁端部内面に段が残る。残高3.8cm。調整等：体部上面回転ヘラケズリ、内外両面ヨコナデ。2須恵器杯蓋。口縁部は屈折面が稜線をなし、内面は沈線状の段となる。口径13.6cm、器高3.7cm。調整等：天井部外面回転ヘラケズリ、その内面にナデ、体部内外両面ヨコナデ。3須恵器杯蓋。全体に丸みを帯び、口縁端部が尖り気味となる。口径12.0cm、残高3.0cm。調整等：天井部外面回転ヘラケズリ、その内面ヨコナデ、体部内外両面ヨコナデ。4須恵器杯蓋。全体に丸みを帯び、口縁部は屈折し、外面は稜線となる。口径12.0cm、器高3.7cm。調整等：天井部外面回転ヘラケズリ、その内面ナデ、体部内外両面ヨコナデ。5須恵器杯蓋。口縁部は屈折し、外面は稜線をなす。その内面に2条の沈線。口径12.0cm、残高2.2cm。調整等：内外両面ヨコナデ。6須恵器杯蓋。口縁部は屈折し、外面は稜線をなす。残高2.5cm。調整等：内外両面ヨコナデ。7須恵器杯身。立ち上がりは内湾し直立する。口径10.2cm、残高2.4cm、受部径12.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ。8須恵器杯蓋。全体に丸みを帯び、内面にかえりを持つ。口径8.8cm、器高3.0cm、受部径11.0cm。調整等：天井部外面回転ヘラケズリ、その内面ナデ、体部内外両面ヨコナデ。9須恵器杯蓋。内面にかえりを持つ。口径10.0cm、残高1.7cm、受部径12.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ。10須恵器杯蓋。内面にかえりを持つ。口径12.0cm、残高1.5cm、受部径14.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ。11須恵器杯蓋。内面にかえりを持つ。口径9.8cm、残高1.1cm、受部径12.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ。12須恵器杯蓋。内面にかえりを持つ。残高1.5cm。調整等：内外両面ヨコナデ。13須恵器杯蓋。内面にかえりを持つ。口径12.0cm、残高1.5cm。受部径13.2cm。調整等：内外両面ヨコナデ。14須恵器杯蓋。口縁部は屈折し、天井部が平坦をなす。口径12.0cm、器高3.5cm。調整等：天井部は回転ヘラケズリ。体部内外両面ヨコナデ、天井部内面ナデ。15須恵器杯身。口縁部は外反し、体部が内湾する。残高2.7cm、調整等：内外両面ヨコナデ。16須恵器椀（金属器模倣）。口縁部はやや外反し、丸みを帯びた体部には5条の沈線を配す。口径12.6cm、残高4.7cm。調整等：体部内外面ヨコナデ。色調：青灰色。胎土：粗い石英粒を多く含む。焼成：良好。17須恵器高杯。脚部は上部に2条の凹線を配し、裾部は上端が突出する。底径8.4cm、残高8.5cm。調整等：内外両面ヨコナデ。18須恵器杯蓋。体部は丸みを帯び、口縁端部は退化した嘴状を呈す。口径17.4cm、残高2.0。調整等：内外両面ヨコナデ。19須恵器杯蓋。体部は低平で、つまみは扁平なボタン状を呈し、口縁端部は丸みを帯びた嘴状を呈す。口径12.6cm、器高1.5cm、つまみ径1.6cm、つまみ高0.7cm。調整等：天井部内面ナデ、口縁部内外両面ヨコナデ。20須恵器杯蓋。体部は低平で、つまみは扁平なボタン状を呈し、口縁端部はやや退化した嘴状を呈す。口径15.0cm、器高1.7cm、つまみ高0.7cm、つまみ径1.8cm。調整等：天井部内面ナデ、口縁部内外両面ヨコナデ。21須恵器杯蓋。体部は低平で、口縁端部は玉縁状を呈す。口径18.2cm、残高1.9cm。調整等：天井部外面回転ヘラケズリ、体部外面ヨコナデ、その内面ナデ。22須恵器杯蓋。体部は低平で、口縁端部は退化した嘴状を呈す。口径15.0cm、残高1.5cm。調整等：内外両面ヨコナデ。23須恵器杯蓋。体部は低平で、口縁端部は全面を強くナデ小さな嘴状をつくり出す。口径13.4cm、残高1.2cm。調整等：内外両面ヨコナデ、24須恵器杯蓋。口縁端部は全面を強くナデ小さな嘴状をつくり出す。口径14.0cm、残高1.5cm。調整等：内外両面ヨコナデ。25須恵器杯蓋。口縁端部は嘴状を呈し、内面は段状に窪む。口径14.2cm、残高1.4cm。調整等：外面ヨコナデ、内面ナデ。26須恵器杯身。口縁部は外反し、底部付近は丸みを帯びる。高台は低く幅広。口径14.8cm、器高3.6cm底径10.4cm、高台高0.4cm、高台幅0.6cm。調整等：体部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ。底部回転ヘラ切後ナデ。27須恵器杯身。底部付近が角張る。高台は低く丸みを帯び、幅が狭い。底径10.0cm、残高1.8cm、高台高0.4cm、高台幅0.4cm。調整等：体部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ。28須恵器杯身。底部付近は張らずに高台部と接し、高台は低く幅が狭い。底径8.0cm、残

高1.8cm、高台高0.4cm、高台幅0.5cm。調整等：体部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ。29須恵器杯身。底部付近が角張る。高台は低く幅広。底径8.4cm、残高1.0cm、高台高0.2cm、高台幅0.9cm。調整等：体部内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ。30須恵器杯身。口縁部は外反するが直立に近く、底部付近は丸みを帯びる。残高5.4cm。調整等：内外両面ヨコナデ。外面下方ナデ。31須恵器杯身。口縁部は外反し底部付近は丸みを帯びる。口径12.8cm、残高3.2cm。調整等：内外両面ヨコナデ。32須恵器杯身（無高台）。口縁部は外反し、底部付近は角張る。口径11.6cm、器高2.8cm、底径7.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ、底部内面ナデ、底部回転ヘラ切後ナデ。33須恵器杯身（無高台）。口縁部は外反し、底部付近は丸みを帯びる。口径13.6cm、器高2.9cm、底径9.4cm。調整等：内外両面ヨコナデ。34須恵器皿。底部付近はやや角張り、高台は低く若干内傾する。底径16.7cm、残高3.0cm、高台高0.4cm、高台幅0.6cm。調整等：内外両面ヨコナデ。35須恵器皿。口縁部は外反し、底部付近は丸みを帯びる。高台は逆台形状を呈す。口径20.2cm、器高3.8cm、底径15.4cm、高台高0.5cm、高台幅1.0cm。調整等：内外両面ヨコナデ。36須恵器鉢（鉄鉢）。口縁部は内湾し、底部は緩やかに外方に張る。底径10.0cm、残高12.1cm、最大径19.0cm。調整等：外面上半部ヨコナデ、下半部回転ヘラケズリ、内面上半部丁寧なヨコナデ、下半部ナデ。底部回転ヘラ切り後ヨコナデ。37須恵器鉢

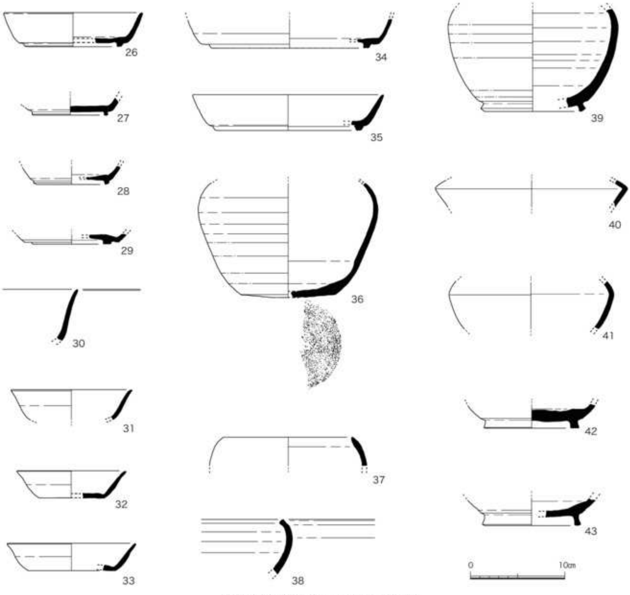


図29　包含層等出土遺物実測図26～43(1/4)

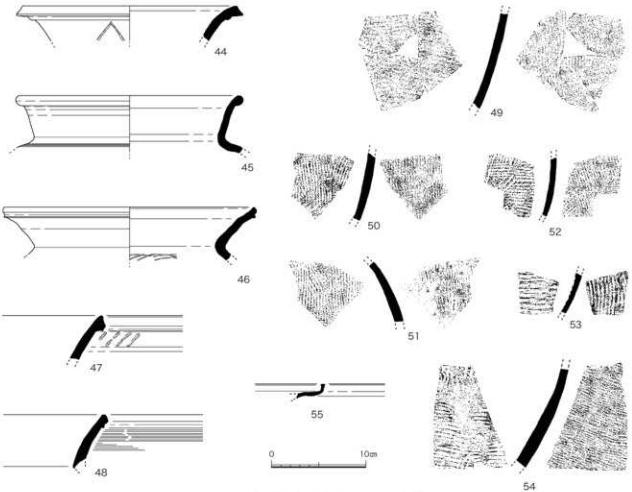


図30　包含層等出土遺物実測図44～55(1/4)

(鉄鉢)。口縁部は内湾し、口縁端部を丸く納める。口径13.8cm、残高3.0cm。調整等:内外両面ヨコナデ。**38** 須恵器鉢（鉄鉢)。口縁部は内湾し、口縁端部は角張る。残高5.8cm。内外両面ヨコナデ。**39** 須恵器壺。肩部及び胴部全体に丸みを帯び、高台は外方に張り出す。底径10.4cm、残高10.8cm、最大径18.0cm。高台高0.8cm、高台幅0.8cm。調整等:外面肩部ヨコナデ、それ以下回転ヘラケズリ。内面強いヨコナデ。**40** 須恵器壺。肩部がソロバン玉状に屈折する。残高2.7cm、最大径20.4cm。調整等:内外両面ヨコナデ。**41** 須恵器壺。肩部が屈折して稜線をなす。残高5.0cm、最大径17.4cm。調整等:内外両面ヨコナデ。**42** 須恵器壺。高台は高く外方に張る。底径10.0cm、残高2.4cm、高台高・幅0.9cm。調整等:底部内面ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ。高台接地面に擦痕。**43** 須恵器壺。高台は高く細い。底径10.4cm、残高2.6cm、高台高1.2cm、高台幅0.6cm。調整等:底部内面ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ。**44** 須恵器甕。口縁部は外反し、口縁端部が嘴状に突出し、下部に1条の半円状突帯。頚部に山形のヘラ記号。口径22.6cm、残高3.7cm。調整等:内外両面ヨコナデ。**45** 須恵器甕。口縁部は逆ハの字状に開き、口縁端部は下方から粘土を貼付け、断面形が円形の粘土帯状を呈す。口径24.0cm、残高6.0cm。調整等:口縁部外面斜位のタタキメ後ヨコナデ、内面ヨコナデ。頚部外面カキメ、内面当て具痕。**46** 須恵器甕。口縁部は大きく外反し、口縁端部下を三角突帯状に突出させる。口径26.4cm、残高5.6cm。調整等:口縁部内外両面ヨコナデ、頚部内面同心円状タタキメ。**47** 須恵器甕。口縁部の開きは弱く、口縁端部下にコ字状突帯を配す。残高4.7cm。調整等:突帯下外面に斜位の刺突文、内面ヨコナデ。**48** 須恵器甕。口縁部の開きは弱く、口縁端部下を三角突帯状に突出させる。残高5.8cm。調整等:口縁部外面カキメ、内面ヨコナデ。**49** 須恵器甕。残高10.1cm。調整等:外面縦位のタタキメの後カキメ。内面同心円状の当て具痕の後、平行文当て具痕。**50・52** 須恵器甕。資

料**48**と同一個体。調整等：外面縦位のタタキメ後カキメ、内面平行文当て具痕。**51**須恵器甕。残高6.3cm。調整等：外面自然釉、縦位のタタキメの後カキメ。内面縦位の平行文当て具痕。**53**須恵器甕。残高4.3cm。調整等：外面縦位の平行タタキメ、内面横位の平行文当て具痕。**54**須恵器甕。残高10.5cm。調整等：外面横位の細かな平行タタキメ、内面同心円状の当て具痕の後横位の平行文当て具痕。**55**須恵器高杯。口縁部は直立し、口縁端部が玉縁状に肥厚する。残高1.5cm。調整等：内外両面ヨコナデ。**56**赤焼土器甕。口縁部は開き気味となり、口縁端部が三角突帯状に突出する。口径14.0cm、残高9.2cm。調整等：外面横位の平行タタキメ、内面無文の当て具痕で、内面に当て具の窪みが連続しており、円形状の当て具の表面にある細かな年輪が圧痕となっている。**57**赤焼土器甕。口縁部は外反し、口縁端部下を三角突帯状に突出させる。残高4.0cm。調整等：内外両面ナデ。**58**土師器手捏鉢。口縁部は外反し、丸底をなす。口径10.2cm、器高6.5cm。調整等：外面ユビナデ、内面横位のナデ。**59**赤焼土器甑。底部は平底で2個の半円孔。残高3.8cm。調整等：内外両面ナデ。**60**赤焼土器甑。底部は平底で2個の半円孔。残高2.0cm。**61**赤焼土器甑。底部2孔中央のブリッジ部分。長さ8.4cm、幅3.3cm、厚さ1.5cm。**62**土師器甑。底部孔付近の破片で、輪積み痕が段状を呈す。残高3.5cm。**63**土師器甑。底部孔付近の破片。残高5.2cm。**64**土師器把手付土器。把手は牛角状で断面形が隅丸方形状を呈す。甑の把手と考える。調整等：全体をユビオサエ、ユビナデ。**65**須恵器鉢か。平底で底部上方に1条の沈線が配される。底径10.8cm、残高1.7cm。調整等：外面上部ヨコナデ、底部付近に横位のヘラケズリ。底部ナデ。底部内面ナデ。底部整形：体部下方に粘土を充填し、底部を貼付けた後、底部内面に薄く粘土を貼って仕上げる。色調：灰白色。胎土・焼成：良好。**66**須恵器無蓋高杯か。杯部下方は丸みを帯び、体部に2条の沈線（凹線）を配す。残高2.9cm、残存径12.0cm。脚部上端の径5.5cm。調整等：杯部下方は斜位の平行タタキメ後ヨコナデ。色調青灰色。胎土・焼成良好。**67**新羅土器（軟質土器）小壺。口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。口径10.8cm、残高3.5cm。調整等：外面縦位の平行タタキメ後ナデ。内面ナデ。色調：橙色。胎土：細砂粒を多く含む。焼成：良い。**68**軟質系土器甕か。赤焼土器の可能性あり。口縁部は外反し、口縁端部は上下に肥厚する。残高4.9cm。外面縦位の平行タタキメ（縄目か）。内面当て具痕。色調：にぶい橙色。胎土：1～2㎜の石英粒を多く含む。焼成：良い。**69**軟質系土器甑か。赤焼土器の可能性あり。口縁部は外反し、口縁端部が下方に肥厚する。胴部は直線的に下方へと続く。口径26.0cm、残高5.6cm。調整等：外面縦位の平行タタキメ（縄目か）、内面同心円状の当て具痕。色調：橙色。胎土：白色粒子を含む。焼成：良い。なお、68と69は同一個体の可能性があり、その場合は、両者とも甑の口縁部片となる。**70**移動式カマド（土師器）。焚口上部の庇部分で、右側面上部のカーブ付近か。長さ4.9cm、幅4.3cm。色調：橙色。胎土：砂粒を多く含む。焼成：良い。**71**移動式カマド（土師器）。左側裾部正面で、左側がヒレ部か。長さ5.3cm、幅4.0cm。色調：にぶい赤褐色。胎土：粗い石英粒を多く含み、1cm角の石英角礫も見受けられる。焼成：良い。**72**移動式カマド（土師器）。体部は寸胴状と推定され、脚部の端が内側に突出する。底径28cm、残高12.0cm。調整等：外面縦位のハケメ後ナデ。内面横位のヘラケズリ。色調：灰白色。胎土：1～3㎜の石英粒を多量に含む。焼成：良い。**73**丸瓦。長さ9.0cm、幅9.3cm、厚さ1.8cm。調整等：外面縄目のタタキメ。内面布目。**74**平瓦。長さ10.4cm、幅12.5cm、厚さ2.0cm。調整等：外面縄目のタタキメ。内面布目。**75**熨斗瓦。長さ10.0cm、幅8.3cm、厚さ3.0cm。調整等：外面縄目のタタキメ。内面布目。**76**転用硯（須恵器甕）。甕の胴部片を長方形状に整形し、内面を硯として利用。長さ10.5cm、幅6.0cm、厚さ1.0cm。調整等：外面縦位のタタキメ後カキメ。内面同心円状の当て具痕。使用された内面の当て具の凹凸は、擦り減っている部分があり、全体に薄い墨痕が認められる。**77**滑石製紡錘車。径3.8cm、厚さ1.7cm、孔径1.0cm。表面に線刻らしき細線が認められる。**78**土錘。長さ6.0cm、幅2.4cm、孔径0.6～0.7cm。**79**土錘。長さ6.6cm、幅2.3cm、孔径0.5cm。**80**土錘。長さ6.7cm、幅1.7cm、孔径0.4cm。**81**土錘。長さ7.5cm、幅2.0cm、孔径0.4～0.5cm。**82**土錘。長さ6.2cm、幅2.3cm、孔径0.4～0.5cm。**83**土錘。3さ5.9cm、幅2.0cm、孔径0.4～0.6cm。**84**土錘。長さ6.5cm、幅1.6cm、孔径0.5～0.6cm。

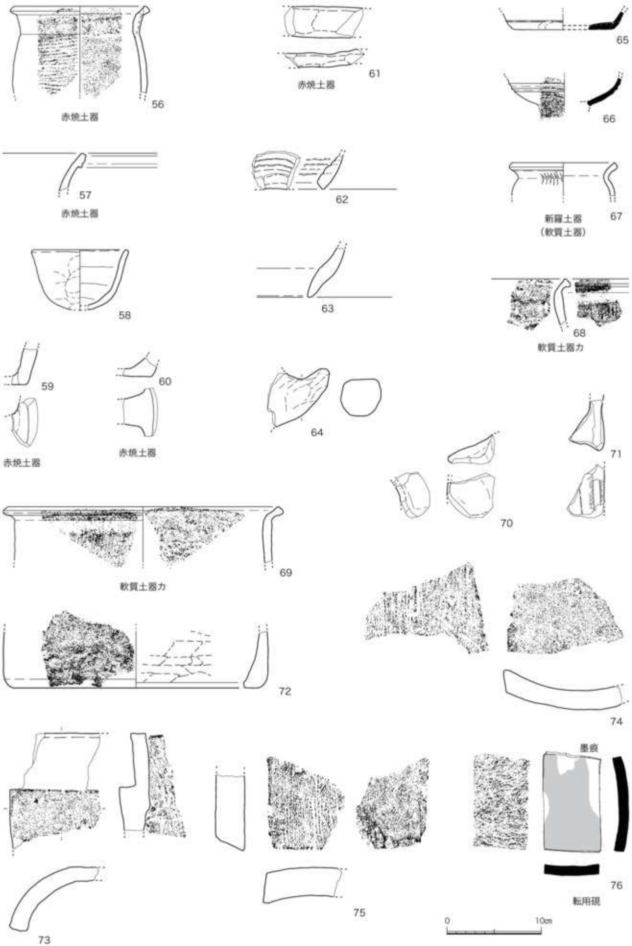


図31　包含層等出土遺物実測図56～76(1/4)

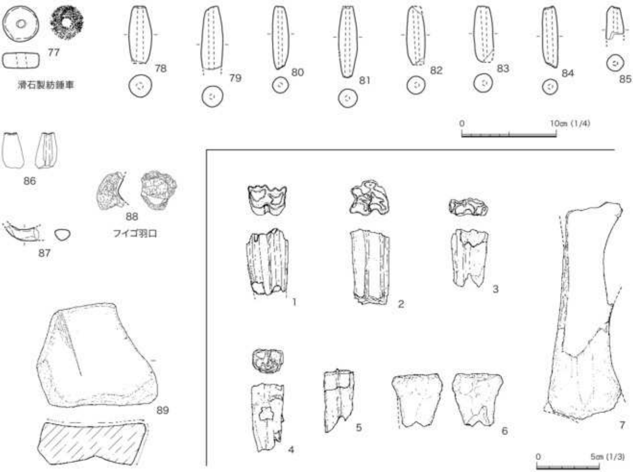


図32　包含層等出土遺物実測図 77～89(1/4)、包含層出土獣骨実測図(1/3)

85 土錘。長さ 3.5cm、幅 1.9cm、孔径 0.4 ～ 0.5cm。**86** 土錘。長さ 3.7cm、幅 2.1cm、孔径 0.8cm。**87** 不明土製品。長さ 3.4cm、幅 1.5cm、厚さ 1.3cm。**88** フイゴ羽口。ガラス質の付着物。長さ 4.0cm、幅 3.7cm。**89** 砂岩製砥石。表面は砥石面、裏面を凹石として使用。周囲の敲打痕は砥石破損後に敲石として使用か。長さ 10.7cm、はば 12.7cm、厚さ 3.5cm。

包含層出土獣骨（図 32）

1 馬歯 1 点（残存長 5.3cm・残存幅 3.2cm)。**2** 馬歯 1 点（残存長 5.9cm・残存幅 3.1cm)。**3** 馬歯 1 点（残存長 4.5cm・残存幅 3.0cm・)。**4** 馬歯 1 点・下顎骨が一部に残る。(残存長 5.2cm・残存幅 2.5cm)。**5** 馬歯 1 点（残存長 4.9cm・残存幅 2.3cm)。**6** 肩甲骨？（残存長 17.2cm・残存幅 5.5cm)。**7** 中手骨（残存長 4.6cm・残存幅 4.0cm)。

おわりに

1 各遺構の時期

ここでは、遺構の前後関係と出土土器等を中心に、各遺構の時期を示す (3)。

掘立柱建物（SB）

SB1 は、主軸を東西とした 1 間 ×2 間の小規模な建物で SD2 を切る。SP24 と SP27 出土の須恵器壺（瓶子）は、8 世紀後半、赤焼土器は 7 世紀頃となろう。また、登り上り遺跡第 6 地点 (4) の調査により、SD2 の時期が 8 世紀中頃～後半となることから、SD2 を切る SB1 は、8 世紀後半～末頃と考えられる。

SB2 は、SP34 出土の須恵器椀（金属器模倣)、須恵器提瓶、赤焼土器は、いずれも 7 世紀初頭～前半頃のものである。SD2 との切り合い関係も含め、建物の時期は、7 世紀初頭～前半頃に求められよう。

土坑（SK）

SK2 は、須恵器蓋に低平なものが多く、嘴状口縁も玉縁状といった形骸化が進むとともに、須恵器杯身は口縁部の開きが大きく、須恵器皿の口縁部は斜め 45

度に開く。いずれも、8世紀後半頃と考えられる。

ただし、図8の**6**須恵器杯蓋や**10**須恵器高杯は、8世紀末に下る可能性があり、遺構の時期としては、8世紀後半～末頃に求められよう。

SK3は、須恵器杯蓋や須恵器杯身が7世紀初頭～前半頃を示し、遺構の時期と考えられる。また、伴出した軟質系土器の縄目のタタキメを施す甕（鉢）や有溝把手の甑も、7世紀前後に求められよう。

溝状遺構（SD）

SD1出土の須恵器や土師器、瓦については8世紀中頃～後半と古くなるが、白磁椀が4点出土しており、12世紀前後の遺構と考えられる。したがって、古代の遺物は、混入と考えられる。

SX20（SD2）出土資料の大半は、SX20に包蔵されていたもので、遺構自体8世紀中頃～後半のSD2に切られている。出土した須恵器杯蓋や土師器高杯は、6世紀末～7世紀初頭のもので、赤焼土器や土師器に関してもその時期で矛盾はない。また、図14の**3**と図15の**13**は新羅土器の軟質小壺で、6世紀後半～7世紀前後と考えられる。

したがって、SX20は須恵器と軟質土器との時期から6世紀末～7世紀初頭頃に求められよう。

SD3は、7世紀前半～中頃を示す須恵器杯蓋、須恵器杯身、須恵器高杯（金属器模倣）と7世紀後半を示すかえりの付いた須恵器杯蓋がある。遺構の時期に関しては、下限を示す図18の**7**須恵器杯身や**17**平瓦が示す、8世紀中頃～後半と考えられる。なお、**8**新羅土器蓋は、6世紀後葉～7世紀前後であろうか、**12**須恵器高杯脚部は同時期の可能性が高く、**1**須恵器杯蓋や**4**、**5**須恵器杯身は、7世紀前半～中頃のもので、新羅土器との共伴の下限を示すと考えられる。

SD4・5は、特徴や規模の一致に加え、並走している点から同一遺構と考えられる。6世紀末～7世紀初頭の須恵器𤭯が出土している。

SD6は、須恵器椀（金属器模倣）、須恵器平瓶、須恵器甕が出土しており、7世紀前後～前半の遺構と考えられる。

不明遺構（SX）

SX1・SX2は、切り合うが時期差は少なく、須恵器杯身が示す7世紀前半～中頃の範囲で、赤焼土器3点も同時期頃に含まれよう。

SX3は、溝状を呈すが遺物が少なく、軒丸瓦片が示す8世紀中頃～後半の時期と考えられる。

SX4は、須恵器杯蓋、須恵器杯身、熨斗瓦片が示す8世紀中頃～後半の時期と考えられる。

SX7・SX8は、SX12とともに、並行する同一遺構と考えられる。図23に示すSX7の**1**須恵器高杯とSX8の**1**須恵器杯身は、7世紀前半～中頃を示す。SX8の**2**須恵器杯蓋と**3**・**4**の須恵器杯身は、8世紀末～9世紀初頭で、遺構の時期を示すと考えられる。

SX11は、図24の**1**・**2**須恵器杯蓋が、7世紀代を示すものの、**3**～**5**須恵器杯蓋、**6**～**9**須恵器杯身、**10**須恵器壺に関しては、8世紀中頃～後半を示しており、遺構の時期と考えられる。なお、**12**甑の有溝把手は、軟質系土器で、金銅製の耳環とともに7世紀代のものと考えられる。

SX13は、7世紀前半～中頃の須恵器杯蓋、杯身、平瓶と8世紀中頃前後の須恵器杯蓋、杯身が混在するが、遺構の時期は後者と考えられる。

SX14は、赤焼土器が主体であり、6世紀末～7世紀前半代に位置付けられようか。図27の**5**甑は、福岡市仲島遺跡[(5)] 46－6区大溝より出土した把手付土器と形状等が近似するようで、6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる。

SX21は、土師器椀が出土しており、8世紀代のものであろう。

包含層（図28～32）

1須恵器杯蓋は、6世紀中頃に相当しよう。**2**須恵器杯蓋は6世紀末～7世紀初頭、**3**～**6**須恵器杯蓋、**7**須恵器杯身は7世紀初頭～前半と考えられる。**8**・**9**須恵器杯蓋、**15**須恵器杯身は、7世紀前半～中頃。**10**～**13**須恵器杯蓋、**14**須恵器杯身は、7世紀後半～末頃になろう。**16**須恵器椀（金属器模倣）は、6世紀末～7世紀初頭、**17**須恵器高杯は同時期か、やや下る可能性がある。**18**～**25**須恵器杯蓋、**26**～**33**須恵器杯身は、概ね8世紀中頃～後半に属すが、一部は8世紀末～9世紀初頭に下るものと考えられる。**34**・**35**須恵器皿は、8世紀中頃～後半。**36**～**38**須恵器鉢（鉄鉢）は、8世紀後半～末頃を中心とする。**39**～**42**須恵器壺は8世紀中頃～後半、**43**須恵器壺は8世紀前後に頃遡る可能性がある。**73**～**75**の瓦は、8世紀中頃～後半頃と考えられる。

新羅土器と考えられる**67**軟質土器小壺は、6世紀後葉～7世紀前葉頃と考えられる。

包含層に関しては、およそ6世紀末〜7世紀後半と8世紀中頃〜後半の2時期に区分されるようである。

2 朝鮮半島系の土器（図33）

近年、内橋地区では発掘調査の進捗とともに、朝鮮半島系の土器が出土するようになり、当遺跡でも10点が出土した。ここでは、周囲の資料も含めて紹介する。

A 内橋登り上り遺跡第7地点

今回調査の分である。土坑、溝状遺構、包含層中より、新羅土器や軟質系土器10点が出土しており、馬骨を伴うものが多く6世紀末〜7世紀前半頃と考えられる。詳細は本報告の個別記載に示している。

B 内橋登り上り遺跡第2地点[6]

平成8年度調査。6世紀後半〜8世紀中頃の土坑15基が構築されている。遺物は、Pit15から単独出土しており、報告記載番号135である。報告では、方形鉢で直径18〜23.4cm、器高10.7cm、底径12.6cm。内外ともに水挽きナデにより緩い段を幾重にも形成し、外底面付近は横位のヘラケズリ、底部は不整方向へのケズリと記載されている。

当資料の器面には、口縁端部より1cm下方より、幅0.2cmほどの突線が約0.4cm間隔で13条めぐる。これは、ロクロ回転を利用し、幅0.4cmほどの浅い凹線を0.2cm間隔で施し突線状としたもので、下半部は上半部ほど明確ではない。この器面の状況は、金属椀の切削痕を表すものと考えられる。内面は、0.5cm幅で浅い凹線状の調整が重層的に施され、壁厚を一定幅に調整する。おそらく、法量からすると、本体の形状は深みのある無高台の椀、もしくは鉢形で、口縁部付近が焼成の際に歪んだものと想定される。また、底部は、平底で外底部へのラケズリ調整は、朝鮮半島の平底鉢に通じる。

色調は、内外両面ともに緑黒色を基調とし、黄緑色の細かな点が多数見られ、黒錆色に緑青が混じる金属椀の表面を想わせる。胎土については、断面の内部が灰色を呈し、表面とは全く異なっている。

現状では、銅製無台鋺の模倣品の可能性があり、形状や内外面の調整等から朝鮮半島系のものと考えられる。類例を求めるなら、韓国忠清南道公州市山儀里40號墳出土の百済系初期台付椀の体部形状や調整[7]が類似する。ただし、口縁端部の形状や高台の有無といった点は異なる。

なお、時期としては調査区内の遺構等の時期から判断して6世紀後半以降のものと考えられる。

C 内橋坪見遺跡第3次調査[8]

平成26年度調査。当遺跡は、8世紀前半〜後半頃の推定駅家跡として「夷守駅」に比定される。当資料は、調査区北側端部の包含層中より、8世紀後半の須恵器や瓦片とともに出土した。これは、緑釉陶器壺の胴下半部片で高台が付く。文様は、隆帯を縦位に貼り付けた鎬文が特徴の優品で、類例には、大阪府藤井寺市小山遺跡出土例[9]がある。7世紀頃のもので統一新羅時代の搬入品と考えられる。

D 内橋鏡遺跡3次[10]

平成30年度発掘調査。当遺跡は、内橋坪見遺跡の西側約200mに位置しており、不定形な土坑が集中する。遺物は、新羅土器扁球形瓶の肩部片で、頚部付根に突帯、肩部に沈線帯を設け、そこに半円点文、三角文、半円点文を配す。6世紀末〜7世紀前半頃と考えられる。

E 内橋登り上り遺跡第5地点[11]

平成30年度発掘調査。当遺跡は、内橋登り上り遺跡第1〜4地点[12]の西側に位置しており、浅い谷状地形の周囲に形成された集落遺跡である。遺物は、谷部包含層中より出土しており、1新羅土器蓋の宝珠形つまみ、2軟質系土器杯（盌）、3軟質系土器鉢で、6世紀末〜7世紀前半頃のものと考えられる。3は未報告資料である。

特に、2基の土坑内から馬歯を伴う下顎骨部分が検出されている。

F 内橋柚ノ木遺跡第2地点[13]

平成31年〜令和元年度発掘調査。当遺跡は、内橋坪見遺跡の西側に位置し、内橋鏡遺跡3次の調査区南に隣接する。土坑、井戸、敷石遺構等が検出され、7世紀〜8世紀前半の包含層中から軟質系の有溝把手5点が出土、その他、鉄製大型釣り針、大型土錘、半球形有孔石製品、馬歯等が得られた。

以上、内橋丘陵とその周辺は6世紀末〜7世紀前半期を中心とする朝鮮半島系の土器が集中する。現状では、壺、杯（盌）、平底鉢、有溝把手付土器といった日

常用の軟質系土器が主体で、陶質の新羅土器を伴う。それらは、丘陵南西側の低地を中心に分布しており、緑釉陶器壺（鎬文）や銅製無台鋺の模倣品といった非日常用の遺物は、丘陵上で見受けられる。これは6世紀末〜7世紀前半期の様相で、8世紀代の官衙（駅家）選定以前の状況を示す。

このように渡来系遺物の集中は、渡来人集団の存在を示しており、当地の特異な一面が窺えよう。当時、丘陵上と周囲の低地とでは、すでに土地の利用に違いがあったと考えられ、特に、丘陵上は後の官衙選定に先立ち、何らかの施設の存在も想像される。

3 獣骨（馬骨等）について

当遺跡では、遺構や包含層中から多くの獣骨が得られたが、いずれも、風化の進行により状態が悪く、全体にかなり脆くなっている。それでも、当調査区内に残存したのは、半ば湿地のような場所であり、周囲の水分の影響と考えられる。出土した骨類は、歯や骨の特徴から馬骨と推定されるが、一部牛骨を含むようである。

ここでは、遺構配置図に、主要遺物と獣骨出土位置を示しており(図34)、それを基に観察を進める。

SK3: 調査区北側に位置する 1.43 m ×1.07 m、深さ 0.35 m の土坑。出土した須恵器等は、7世紀初頭〜前半頃のもので、伴出した縄目のタタキメを施す甕(鉢)や有溝把手付土器（甑）は、いずれも朝鮮半島系の軟質系土器で、同様に7世紀前後頃に位置付けられよう。

獣骨は、橈骨・尺骨、脛骨、上腕骨、中手骨、中足骨で、その特徴から馬骨と推定。それらは、いずれも1本の骨に対し 1/3、あるいは 1/4 程度が残されている。その中で、2脛骨の折損箇所に、一部直線状の断面が観察され、人為的な切断面の可能性がある。しかし、保存状態が悪く断定は困難である。

今回出土した上腕骨、尺骨・橈骨、中手骨の各部位は、前肢の一部であり、脛骨、中足骨は後肢の一部に相当する（図 35）ものと考えられ、足部以外の骨は含まれず、須恵器、赤焼土器、朝鮮半島系の土器片と共伴している。このように、馬骨の断片や土器片を含む点において、当遺構は廃棄土坑と考えられる。おそらく、斃馬の解体処理を行なった後に、土坑に廃棄したものであろう。

SX20（SD2）:SX3 の南側に隣接する長さ 3.46 m 幅 2.5 m、深さ 0.20 mの隅丸長方形を呈す浅い土坑で、中央付近を SD2 に大きく切られる。出土した須恵器等は、6世紀末〜7世紀初頭頃、新羅土器の軟質小壺は、6世紀後半〜7世紀前後と見られ、遺構の時期は、6世紀末〜7世紀初頭頃と考えられる。

獣骨は、馬歯、下顎骨、肩甲骨、寛骨、大腿骨、脛骨、中足骨、中手骨等で、その特徴から馬骨と推定。

出土した肩甲骨と中手骨は、前肢の一部、寛骨、大腿骨、脛骨、中足骨は後肢に相当し（図 36）、下顎骨と歯の一部も出土している。SK2 に比べ骨の数は多いが足部の骨が中心で、それに肩甲骨と寛骨が加わる。

当遺構は、SK2 と同様に須恵器等や朝鮮半島系の土器片が伴出する廃棄土坑と考えられ、斃馬の解体処理の後に、土坑に廃棄したものであろう。

SX14:SX20 の南側に位置しており、長さ 3.5 m、幅 2.5 m、深さ 0.08 〜 0.16 m の楕円形状を呈す浅い土坑で、調査区内で最も低い場所に位置する。遺物は、6世紀末〜7世紀前半代の赤焼土器等が主となろう。

獣骨は馬歯、下顎骨、肩甲骨、橈骨・尺骨、橈骨・尺骨、中足骨、距骨等で（図 37)、その特徴から馬骨と推定。ただし、1点のみだが、背側縦溝等の特徴から牛の中足骨と判断した。

出土した骨は、SX20（SD2）と同様で、頭骨の一部（下顎骨）と前肢と後肢の部分骨となり、牛骨の中足骨も含まれる。それらは、足部でも前肢骨が中心となるようである。これも、SK2 等と同様に廃棄土坑と考えられ、確実に牛骨を伴うなら、斃牛馬の解体処理となり、その後に廃棄した土坑となろう。

その他、SX14 付近の低位置に堆積した包含層中より出土した獣骨（馬骨）は、複数の馬歯、肩甲骨、中手骨等で、廃棄土坑中のものと同様の足部や歯となる。これらは、当調査区の廃棄土坑が非常に浅いため、より低位な場所に流出、あるいは浮いた状態のものは、遺構上部の包含層中に混在したものと考えられる。包含層の土器類は、6世紀末〜7世紀後半と8世紀中頃〜後半の2時期に区分されるが、それらは前者に伴うものと考えられる。

なお、朝鮮半島系の土器が出土した内橋登り上り遺跡第5地点 (14) では、2基の土坑からそれぞれ馬の片側の下顎骨と歯が出土し、内橋柚ノ木遺跡第2地点 (15) では包含層から馬歯が出土している。

以上の出土例から、いずれも6

世紀末～7世紀前半頃に位置付けられるようで、現九州電力東福岡変電所の南西側を中心とする低地には、朝鮮半島系土器を伴う牛馬関連の遺構が広がると考えられる。

4 近年の動向より

近年、発掘調査の進展にともない、丘陵部では古代官衙（夷守駅）の存在が浮上し[16]、丘陵周辺においても古代官衙成立の前段（6世紀末～7世紀前半頃）の様相が明らかになりつつある。

内橋鏡遺跡2次調査の報告では、同遺跡検出の径19m程の円形に復元される2号溝（6世紀末～7世紀初頭）に、馬などの家畜を飼育した柵状の構造物で、その北側に位置する1号土坑墓は、単独墓で折損した鑷子状鉄製品を伴う点から、馬葬墓の可能性が提示された[17]。内橋柚ノ木遺跡第2地点の報告では、井戸・洗い場・排水溝（小形木樋を埋設か）の組合せに、鉄製大型釣針、大型土錘1点と通常の土錘15点、甑把手23個体分という遺物から、組織的な保存食生産集団の存在が挙げられた。また、同遺跡や周囲の遺跡で確認された弧を描く細い溝に対し、馬歯の集中的な出土状況を踏まえた上で、馬の囲いである可能性と組織的な馬匹管理の存在をも示唆し、新羅土器や有溝把手土器といった朝鮮半島系土器の出土から、両者への渡来人集団の関与が指摘された[18]。

今回、まとまった馬骨（牛骨を含む）の存在は、6世紀末～7世紀前半頃の当地において、ある程度まとまった馬の存在とそれに牛が加わる可能性を示す。また、土坑に廃棄された馬骨等が足部、下顎骨や歯に限定される点は、斃牛馬が解体処理され、部位ごとに区分され利用された後に廃棄された可能性を示す。おそらく、広範囲を調査すれば頭骨、脊椎、肋骨といった各部位がまとまって検出される可能性があろう。それらは、共伴する日常用の朝鮮半島系土器類から、斃牛馬処理に渡来人集団の関与が考えられる。

当地周辺の馬骨出土遺跡を掲示すると、東へ1km程の地点に戸原寺田遺跡[19]が位置する。そこは、多々良川左岸に形成された6世紀中頃～6世紀末頃の集落遺跡で複数の馬歯が出土した。当遺跡の前段に相当する集落で、朝鮮半島系土器として陶質の甕2点と軟質系平底鉢1点が出土している。また、当遺跡から北へ500mほど進むと戸原鹿田遺跡[20]があり、灌漑用の溝状遺構埋土中より古墳時代後期と目される馬歯が10本程度出土している。

現在、馬骨出土の遺跡は、多々良川左岸に相当する戸原から内橋地区に限られるようで、時期的に見れば、6世紀中頃～6世紀末の戸原地区と6世紀末～7世紀前半の内橋地区とに区分され、前者から後者へ移行する状況にある。いずれも、糟屋屯倉の時期と重なる。

当地域と馬との関連性については、宮田浩之氏の提言[21]が参考となろう。氏によれば、小郡市三国丘陵一帯で調教された馬の一部が、糟屋郡宇美町の観音浦古墳群[22]の集団の関与により大宰府の東側から糟屋郡を北上する現国道35号線付近のルートを通じ沿岸部に送り出されたとされ、小郡市域で飼育された馬が、糟屋屯倉関連の沿岸部から朝鮮半島に搬出された可能性が示された。

近年、阿恵（官衙）遺跡の調査によって確認された古代道路[23]は、先の小郡・宇美ルートに関し具体的候補となろう。それは、小郡⇒大野城⇒ヒナモリ峠[24]⇒宇美というコースを辿ると大野城北側山麓付近に達する。その付近には、多量の馬具、小形仿製鏡、榮山江流域産の甕が出土した宇美町の正籠前方後円墳[25]が位置しており､その北側付近で阿恵(官衙）遺跡へと続く直線道路と交差する。この道路は、観音浦古墳群の東側を北進し宇美八幡宮付近から志免町を通り、粕屋町の仲原付近から阿恵（官衙）遺跡に至る。さらに、同遺跡から北に300mほど進むと駅路と交わり、交差点を約500m北進すると内橋丘陵上に到達する。

なお、当丘陵の北側には、先の戸原鹿田遺跡[26]、8世紀中頃と中世の馬歯が出土した福岡市多々良込田遺跡[27]が位置しており､その先に多々良川が流れる。この丘陵北側付近には、馬に関連する地名として馬渡、馬苦労、草場、小草場という字名が存在し、小草場については「こくさは」として筥崎大宮司分坪付帳[28]に記載があって､中世にさかのぼる。

以上の点から、当遺跡を含む内橋丘陵は、7世紀前後の時期において、小郡方面等からの馬を受け入れ、多々良川から博多湾を経て朝鮮半島等へ船で搬出する。その際、馬を集め一時的に管理を行なった場所と考えられる。また、まとまった数を取り扱う以上、斃馬の存在とその処理は不可欠となろう。当遺跡を含む丘陵地南西側の低地付近は、馬骨等の廃棄土坑や内橋登り上り遺跡第5地点のような祭祀関連土坑[29]といった遺構が集中しており、斃馬等の

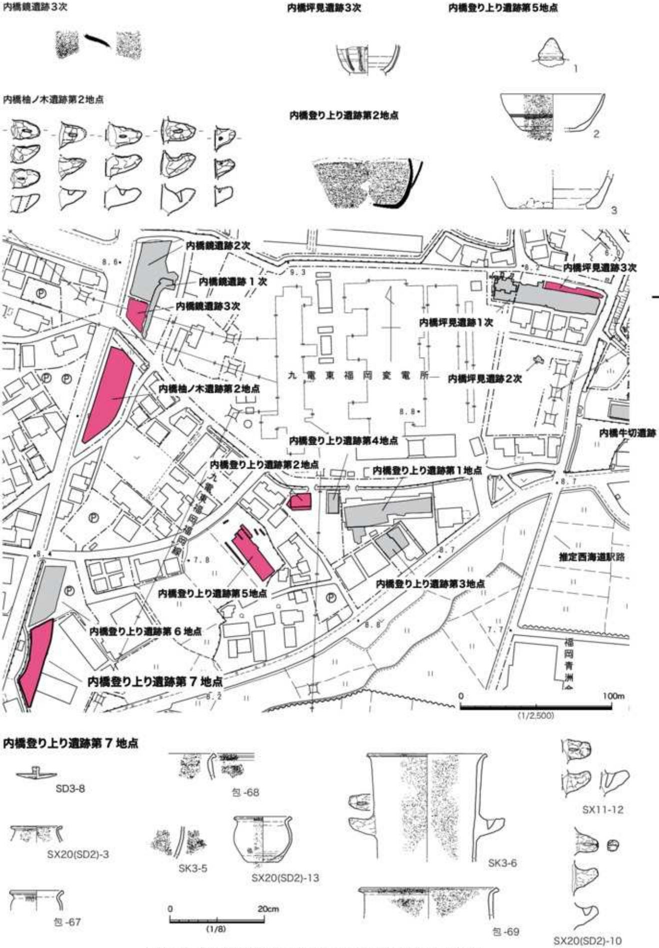


図 33　内橋登り上り遺跡周辺遺跡（1/2,500）の半島系遺物（1/8）出土状況

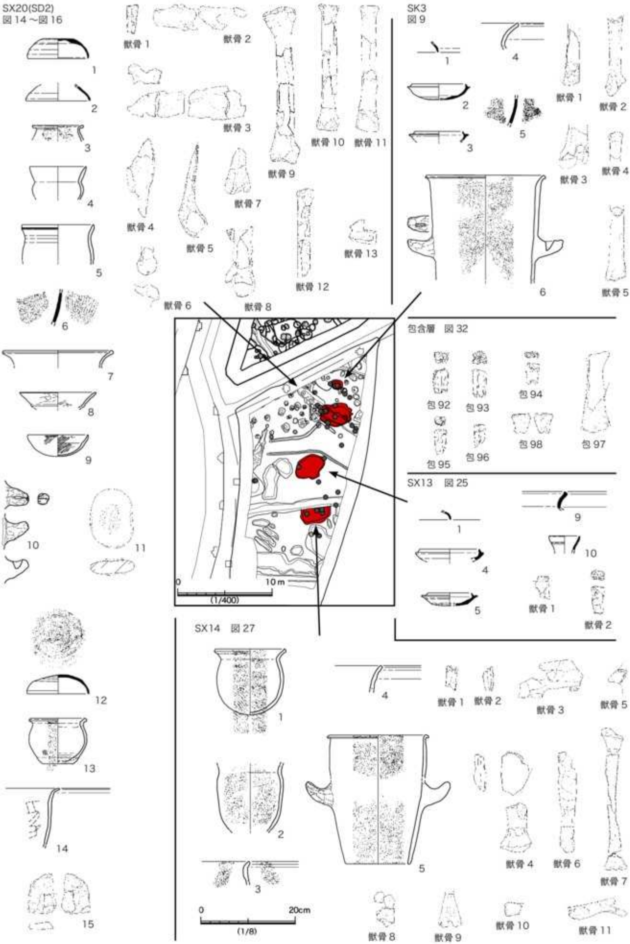


図 34　内橋登り上り遺跡第 7 地点出土遺物、出土獣骨（1/8）分布図（1/400）

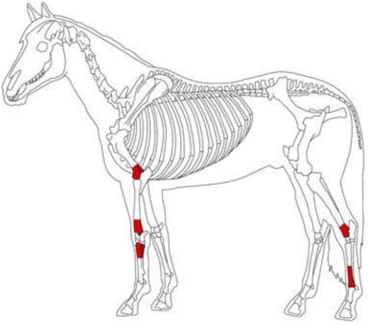


図 35　SK3 出土獣骨想定図

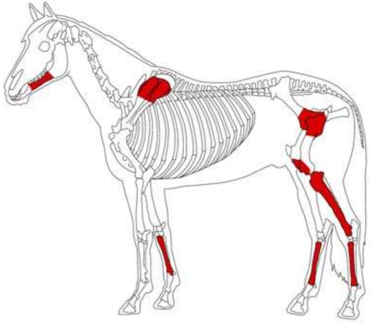


図 36　SX20（SD2）出土獣骨想定図

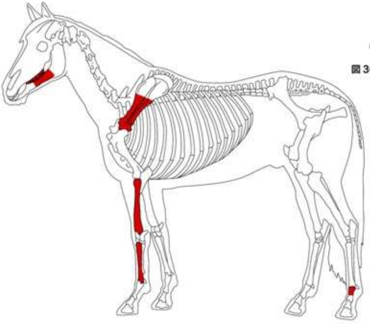


図 37　SX14 出土獣骨想定図

処理と利用とともに、祭祀等も行なわれたようである。それらは、複数の朝鮮半島系土器の存在が示すように、馬等に関連した生業と携わる渡来人集団の存在があり、近郊には彼らの居住地が所在していた蓋然性が高い。

註

(1) 粕屋町教育委員会 2022『内橋登り上り遺跡第 6 地点』粕屋町文化財調査報告書 第 58 集

(2) 寺井誠 2012「6・7 世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第 15 回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集。

(3) 須恵器は、大野城市教育委員会 2008『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』、土師器は、重藤輝行 2009「古墳時代の中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『地域の考古学』佐田茂先生退任記念論文集、新羅土器など朝鮮半島系の土器については、重見泰「7～8 世紀を中心とする新羅土器の形式分類－「新羅王京様式」構築に向けての基礎研究」－」『文化財学報』22 奈良大学文学部文化財学科。崔秉鉉著小池史哲・武末純一・訳 2018「新羅後期様式土器の編年」『古文化談叢』81 集九州古文化研究会を参照する。

(4) 註（1）に同じ。

(5) 上田龍児 2013「御笠川流域の古墳時代－集落・古墳の動態からみた画期とその背景」『福岡大学考古論集 2』考古学研究室開設 25 周年記念福岡大学考古学研究室　なお、福岡市博多区～大野城市にかけて広がる仲島遺跡大溝中から馬骨の頭蓋骨や下顎骨のみ 20 体分が検出されている。

(6) 粕屋町教育委員会 1997『内橋登り上り遺跡第 2 地点』粕屋町文化財調査報告書 第 11 集

(7) 山本孝文 2012「百済の泗沘遷都と周辺集落の動向」『日韓集落の研究－弥生・古墳時代および無文土器～三国時代－（最終報告）』日韓集落研究会日本側事務局韓日集落研究会韓国側事務局

(8) 粕屋町教育委員会 2015『内橋坪見遺跡 3 次』粕屋町文化財調査報告書 第 38 集

(9) 楢崎彰一監修 1998「朝鮮半島陶磁」『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』開館 20 周年記念特別企画展愛知県陶磁資料館

(10) 粕屋町教育委員会 2020『内橋鏡遺跡 3 次』粕屋町文化財調査報告書 第 51 集

(11) 粕屋町教育委員会 2020『内橋登り上り遺跡第 5 地点』粕屋町文化財調査報告書 第 53 集

(12) 粕屋町教育委員会 1994『内橋登り上り遺跡』粕屋町文化財報告書 第 8 集、粕屋町教育委員会 1997『内橋登り上り遺跡第 2 地点』粕屋町文化財報告書 第 11 集、粕屋町教育委員会 1997『内橋登り上り遺跡第 3 地点』粕屋町文化財報告書 第 12 集、粕屋町教育委員会 2001『内橋登り上り遺跡第 4 地点』粕屋町文化財報告書 第 17 集

(13) 粕屋町教育委員会 2021『内橋柚ノ木遺跡第 2 地点』粕屋町文化財報告書 第 55 集

(14) 註（11）に同じ。

(15) 註（13）に同じ。

(16) 粕屋町教育委員会 2013『内橋坪見遺跡概要報告書』粕屋町文化財報告書 第 35 集、粕屋町教育委員会 2019『内橋坪見遺跡 1 次・2 次』粕屋町文化財報告書 第 44 集

(17) 粕屋町教育委員会 2017『内橋鏡遺跡 2 次調査・内橋カラヤ遺跡』粕屋町文化財報告書 第 40 集

(18) 註（13）に同じ。

(19) 粕屋町教育委員会 2017『戸原寺田遺跡』粕屋町文化財報告書 第 41 集　なお、2020 年度に 2 次調査が行なわれ、さらに、朝鮮半島系土器や馬歯が出土している。2023 年 3 月報告書刊行予定

(20) 粕屋町教育委員会 1991『戸原鹿田遺跡』粕屋町文化財報告書 第 3 集

(21) 桃崎祐輔 2012「牧の考古学－古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓－」『日韓集落の研究－弥生・古墳時代および無文土器～三国時代－（最終報告）』日韓集落研究会日本側事務局韓日集落研究会韓国側事務局

(22) 宇美町教育委員会 1981『宇美観音浦』

(23) 粕屋町教育委員会 2018『阿恵遺跡』粕屋町文化財報告書 第 43 集

(24) 青柳種信著福岡古文書を読む会編 1993『筑前国續風土記拾遺』上巻 株式会社文献出版抜粋「又五領より大浦谷をのほりて表糟屋郡吉原村へ越る道あり。日守峠と云。五領ち上る坂を厩坂といふ。駅坂なるへし。」

(25) 宇美町教育委員会 1990『正籠古墳群』宇美町文化財調査報告書 8 集

(26) 註（20）に同じ。

(27) 福岡市教育委員会 1972『多々良遺跡調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書 20 集、福岡市教育委員会 1980『多々良込田遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書 53 集、福岡市教育委員会 1985『多々良込田遺跡Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書 121 集

(28) 市瀬洋子 1992「第二章 中世の粕屋町」『粕屋町誌』粕屋町

(29) 松井章・神谷正弘 1994「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』80 巻 1 号　内橋登り上り遺跡第 5 地点では、調査区中央に沼状の水の溜まり場跡があり、その南側を中心に 7 世前後の井戸や土坑が複数検出され、2 基の土坑から馬の下顎骨と馬歯の一部が検出された。水の溜まり場や井戸の存在から、水神に捧げた犠牲馬の可能性があり、渡来人集団の関与が考えられる。日本書紀巻二十四皇極天皇七月「戊寅に、群臣相語りて曰はく、村村の祝部所教の随に、或いは牛馬を殺して、諸々の社の神を祭る。或いは頻に市を移す。或いは河伯を禱る。既に所效無し。」との記載もある。

図版

SX14 獣骨出土状況［検出時］

調査区南側全景（南から）

調査区南側全景（北から）

調査区北側全景（南から）

調査区北側全景（北から）

SB1 完掘状況全景（南から）

SB1 検出完掘状況（東から）

SB2 検出状況（西から）

SB2 完掘状況（西から）

SK2 土層状況（南から）

SK3 土層状況（東から）

SK2 完掘状況（南西から）

SK3 獣骨出土状況（東から）

SD1 完掘状況（西から）

SD2 完掘状況（南東から）

SX20 完掘状況（南東から）

SK14 土層状況（東から）

SX14 遺物・獣骨出土状況（西から）

SK2-1（図８）

［左］SD2-10（図14）［右］SX11-12（図24）

SK2-2（図８）

SD2-1（図14）

SK2-7（図８）

SX20-12（図15）

SK2-9（図８）

SX20-13（図15）

SD3-8（図18）

包76（図31）

SX3-3（図21）

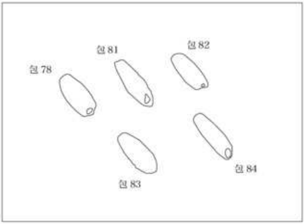
包77（図32）

図版

SX11-14（図24）

SD4-10（図26）

SX14-1（図27）



報告書抄録

ふりがな	うちはしのぼりあがりいせきだい７ちてん
書名	内橋登り上り遺跡第７地点
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 61 集
編著者名	福島日出海、尾方禎莉、髙橋幸作
編集機関	粕屋町教育委員会
所在地	〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号
発行年月日	2023 年３月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内橋登り上り遺跡第７地点	福岡県糟屋郡粕屋町内橋東二丁目 301-3、302-20	403491	280082	33°37′12″	130°27′30″	2021.10.25～2022. 3. 7	556㎡	県道福岡東環状線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内橋登り上り遺跡第７地点	集落	古墳時代～奈良時代	掘立柱建物、土坑、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦、石器	新羅土器や朝鮮半島系の軟質土器とともに獣骨多数検出

要約

調査では、掘立柱建物（SB）２棟、土坑（SK）２基、溝状遺構（SD）６条、その他の遺構（SX）13 基、その他多数のピット等が検出された。

遺物は、６世紀末～７世紀前半と８世紀中頃～後半の２時期を中心に、土師器、須恵器、赤焼土器等が出土し、須恵器杯身の底部には墨書が観察された。

なお、SK3、SX20（SD2）、SX11、SX13、SX14 とそれらを覆う包含層中より、新羅土器や朝鮮半島系の軟質土器とともに獣骨（馬歯を含む馬骨等）が多数検出された。

内橋登り上り遺跡第７地点　粕屋町文化財調査報告書第 61 集

令和５（2023）年３月 31 日　発行

発行　粕屋町教育委員会

〒811-2314　福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目１番１号（粕屋町立歴史資料館）

印刷・製本　株式会社　博多印刷

〒812-0028　福岡県福岡市博多区須崎町８番５号